

落原拾葉続卷三十一

横川山巡覽記

『辰野町資料第八十七号』より

目次

はじめに	3
横川山巡覧記	5
「横川山巡覧記」について	25
「横川山巡覧記」に記された植物	31
横川山巡覧記意識	37
編集後記	49

今回取り上げた「横川山巡覧記」は、江戸後期の寛政十一年（一七九九）に高遠藩の御立山支配のために行われた源流域調査の復命書である。これは後に中村元恒・元起父子によって編纂された『落原拾葉続巻之三十一』に収められて、進徳館文庫から現在は高遠町図書館に収蔵されている。

辰野町公民館の古文書学習講座では、地元史料としてこれを学習教材に選び、平成四年から五年にかけて、解読と内容の研究に取り組まれた。講座の方々は左記の通りで、お名前を記して敬意を表する次第である。

赤羽 篤・赤坂茂喜・阪本今朝男・宮原きみ子・熊谷久志・赤坂 保・花岡美智子

田附朝男・小池悟志・加藤福三・野沢 誠・茅野益穂・高井宗男（敬称略）

また、辰野町教育委員会では、この講座の研究成果を「辰野町資料第八十七号」として平成六年三月に出版し、関係者に配布した。その内容は「横川山巡覧記」の解読原文と書下し文を上下に掲載し、赤羽氏の同記について・茅野氏の植物についての寄稿文、参考地図としての高遠町図書館所蔵の岩崎家史料の「横川山御立山絵図」・唐沢今朝之氏作成の「横川谷地図」などを載せている。

『語りつぐ天竜川』シリーズでは、辰野町教育委員会の御了解のもとに「辰野町資料八十七号」から転載編集を許されたが、書下し文に限って言えば、このままの体裁では古文書を見慣れない方には難解であると思ひ、屋上屋を重ねるようで恐縮であるが、あえて現代語訳を載せることにした。原文では主語がはっきりしないなど難しいところがあり、そのままの引き写しではない。文責は北原にある。

（北原 優美）

凡 例

本文は二段組とし、上段に「原文」を、下段に「書き下し文」をのせた。原文を活字化するについては、次の点に意を配った。

- (一) 変体がなは、すべて平がなになおした。
- (二) 送りがなの有無については原文のままとした。
- (三) 助詞として用いられている漢字やカタカナは右寄せとした。
(例) 者(ハ) 江(ヘ) 茂(モ) 而(テ)
- (四) 慣用的に用いられている文字についてはそのまま用いた。
(例) 者(より) く(々)
- (五) 読みやすくするため、句点(。)、読点(、)、並列点(・)を適宜つけた。

落原拾葉續卷之三十一 信濃 中邨元恒 編

男 元起 校
岡邨氏 撰

横川山巡覽記

寛政十一^{己未}五月廿八日、先達^而御沙汰有之候横川御山見分、来月七・八日比登足可仕段申達候。

一、右^ニ付御代官老人、御山方老人、同道可仕哉之段申達候処、召連候様御用番五郎左衛門殿被仰聞候。依之伊藤安藏・小林杉左衛門^江申渡、同道仕候段^并物書伊藤形助召連候段^茂一應御物語致置候。

一、高山之儀^ニ付山上^江罷出候節騒敷候^者、万一兩天續^ニ可相成^茂難斗候間、往来日数之儀^者難相極候旨^并山中止宿^茂仕候。此儀^ニ付鉄砲持参仕度旨申達候処、勝手次第之旨御用番被仰聞候。

一、右日限頃罷越候段横川村^江申渡置、中山忠左衛門^江申渡。尤決^而馳走^テ間敷儀無之様、殊更此度^者人数多召連候儀^ニ付、村方難渋無之様可被取斗同人^江申渡候。

一、六月朔日、伊藤安藏・小林杉左衛門・伊藤形

落原拾葉續卷之三十一 信濃 中邨元恒 編

男 元起 校
岡邨氏 撰

横川山巡覽記 (書き下し文)

寛政十一^{己未}五月廿八日、先達^{せんたつ}て御沙汰^{ちのとおひつ}これあり候横川御山見分、来月七・八日比登足^{とら}仕るべき段申し達し候。

一、右に付き御代官老人、御山方老人、同道仕るべき哉^やの段申し達し候処、召し連れ候様^{さま}御用番五郎左衛門殿仰せ聞かされ候。これに依り^よ、伊藤安藏・小林杉右衛門へ申し渡し、同道仕り候段並びに物書き伊藤形助召し連れ候段も一応御物語り致し置き候。

一、高山の儀につき山上へ罷^{まか}り出で候節騒がしく候は、万一兩天続きに相成るべくもはかり難く候間、往来日数の儀は相極^まめ難く候旨、並びに山中止宿も仕り候。この儀に付き鉄砲持参仕りたき旨申し達し候処、勝手次第の旨御用番仰せ聞かされ候。

一、右日限頃罷り越し候段、横川村へ申し渡し置き、中山忠左衛門へ申し渡す。尤も決^{もつと}して馳走がましき儀これなき様、殊更この度は人数多く召し連れ候儀に付き、村方難渋これ無き様取りはからるべく同人へ申し渡し候。

助^江召連候段申渡候。但目付後藤伴左衛門、平^ニ而本
田伝五左衛門兩人供^ニ付別段^ニ賄斗候。可相濟段小
頭^江申渡。尤安藏下役被召連諸事賄^ニ付、万端手
輕^ニ相濟候様可被申渡同人^江申渡ス。

一、同二日、右之段申渡候^而、安藏^江被申聞候。

一、右登山之旨申遣^ニ付、山中泊り小屋等^并道筋之
儀如何可申付段、忠左衛門^江申聞候処、泊小屋之
儀^者山師共、細工小屋^ニ而^成可相濟時宜^ニ因り行掛り^ニ
野宿^成可致候間、決^而取求小屋杯^ニ不及候段可被申
付、道筋之儀^成行掛り通用不相成^者、伐明候^而可相
濟候間、道作^ニ及^バズ、且食物之儀^者、米・味噌
斗^ニ而^宜、野菜物杯多く持參之儀^者、堅仕間敷旨被申
付可然及挨拶候。

一、五日、荷洞油七枚、渋紙八枚 御武具方^方

一、渋紙七枚 御賄方^方

右申立御用相濟次第可相納候段、差出帳^江為相記請
取之。

一、鐘持 御中間 壹人

一、蠟燭 十五挺 但三十目掛

右申立請取申様物書^江申渡ス。

一、六月朔日 伊藤安藏・小林杉左衛門・伊藤形助へ召し連れ
候段申し渡し候。但し目付後藤伴左衛門、平にて本多伝五左衛
門、兩人供に付き別段に賄^ニはかり候。相濟むべき段小頭へ申
し渡す。もつとも安藏下役召し連れられ、諸事賄いに付き、万
端手輕に相濟み候よう申し渡さるべく、同人へ申し渡す。

一、同二日、右の段申し渡し候て、安藏へ申し聞かされ候。

一、右登山の旨、申し遣わすに付き、山中泊り小屋など並びに
道筋の儀いかに申し付くべき段、忠左衛門へ申し聞き候ところ、
泊り小屋の儀は、山師共細工小屋にても相濟むべく、時宜に因
り行き掛りに野宿も致すべく候間、決して取り求め小屋などに
及ばず候段申し付けらるべく、道筋の儀も行き掛り通用相成ら
ざるは、伐り明け候て相濟むべく候間、道作りに及ばず、且食
物の儀は、米・味噌ばかりにて宜しく、野菜物など多く持參の
儀は、堅く仕るまじき旨申し付けられ、しかるべく挨拶に及び
候。

一、五日、荷洞油七枚、渋紙八枚 御武具方より

一、渋紙七枚 御賄方より

右申し立て御用相濟み次第、相納むべく候段、差し出し帳へ相
記させ、これを請け取る。

一、鐘持 御中間 壹人

一、蠟燭 十五挺 ただし三十目掛

六日

一、惣人数左之通相極候。

岡村十郎兵衛供

組目付

後藤伴左衛門

若党

本多伝五左衛門

原谷四郎左衛門

本多与惣治

日影村

御願申達之上召連

中村善右衛門

駕 籠 人足 六人

駄荷馬 壹疋

同 壹疋

但若党江相合

鍵 持 壹人

草履取 壹人

分持人足 壹人

合羽籠 壹人

十六人 馬 貳疋

伊藤安藏

下役

右申し立て請け取り申すよう物書へ申し渡す。

六日

一、惣人数左の通り相極きめ候。

岡村十郎兵衛供

組目付

後藤伴左衛門

本多伝五左衛門

若党

原谷四郎左衛門

本多与惣治

御願い申し達しの上召し連れ

日影村 中村善右衛門

駕 籠 人足 六人

駄荷馬 壹疋

同 壹疋

但し若党あいあいへ相合

鍵 持 ち 壹人

草履取 り 壹人

分持人足 ぶもち 壹人

合羽籠 壹人

十六人 馬 貳疋

岩崎源蔵

乗馬 壹疋

荷附馬 壹疋

草り取 壹人

分持人足 壹人

小林杉左衛門

乗下 壹疋

伊藤形助

乗下 壹疋

ノ六人 四疋

惣ノ廿二人 内人足 九人

六疋 内乗馬 三疋

一、三日町橋場二而馬通用無之ニ付、平出村通罷越候間、依之同村泊宿申付候段并日限伊藤安蔵申渡ス。

一、町人馬平出村繼たて圖二而、明八日九時差出候様、可申付物書江申渡。尤安蔵・杉左衛門兩人共ニ。

八日
一、四時過御城江罷出、弥今日横川村江發足仕候段申達候。大目付中江届口上二而申断。

伊藤安蔵

下役

岩崎源蔵

乗のり馬うま 壹疋

荷附馬 壹疋

草り取 壹人

分持人足 壹人

小林杉左衛門

乗のり下した 壹疋

伊藤形助

乗下 壹疋

ノ六人 四疋

惣ノ廿二人 内人足 九人

六疋 内乗馬 三疋

一、三日町橋場にて馬通用これなきに付き、平出村通り罷り越し候間、これにより同村泊宿申し付け候段、並びに日限、伊藤安蔵申し渡す。

一、町人馬平出村繼立て図りにて、明八日九時差し出し候様申し付くべく物書きへ申し渡す。尤も安蔵・杉左衛門兩人共に。

八日

一、大遠眼鏡拜借仕度、此間御用番孫右衛門殿^江申達置候処、今日被成御渡請取之。

一、九時過高遠^江登足。

一、芦沢村^ニ小休、笠原村^ニ小休。

一、卯ノ木茶屋^ニ小休、茶代為差置候。

一、樋口村勘五郎宅^ニ暫休^ミ。平出・横川役人罷出候。

一、御領分御境目^江上伊那村役人罷出候。(御領分

御境目は樋口村の手前)

一、平出村^江暮時前着宿。名主 文四郎

九日

一、五時過平出村出立。

一、飯沼沢村河原^ニ小休。

一、九時前門前村着宿。瑞光寺

但此節蠶時分^ニ付、在家故障有之候間、先達^而申付^而尋之上、此度宿當主^江申付る。

一、村役人共召呼、山内之様子相尋候処、道方以の外不宜昨日^ハ藪深き処^ハ伐明ヶ候^者、已後村方山師共仕合之由^ニ申聞候。

山小屋之儀^者、柳小屋と申処^江、山宿之図り候由、

一、四時過ぎ御城へ罷りいで、いよいよ今日横川村へ発足仕り候段、申し達し候。大目付中へも届け、口上にて申し断る。

一、大遠眼鏡拜借仕り度く、この間御用番孫右衛門殿へ申し達し置き候処、今日御渡しなされ、これを請け取る。

一、九時過ぎ高遠^江登足。

一、芦沢村にて小休、笠原村にて小休。

一、卯ノ木茶屋にて小休、茶代差し置かせ候。

一、樋口村勘五郎宅にて暫く休み。平出・横川役人罷り出で候。

一、御領分御境目へ、上伊那村役人罷り出で候。

一、平出村へ暮時前着き宿す。名主 文四郎

九日

一、五時過ぎ平出村出立。

一、飯沼沢村河原にて小休。

一、九時前、門前村着き宿す。瑞光寺

但し、この節蠶時分に付き、在家故障これあり候間、先達^だて申し付けて尋ねの上、この度宿當主へ申し付ける。

一、村役人共召し呼び、山内之様子相尋ね候処、道方以の外宜しからず、昨日より藪深きところは伐り明ヶ候へば、以後村方山師共仕合の由に申し聞き候。

山小屋の儀は、柳小屋と申す処へ山宿の図り候の由、小屋も

小屋^茂有、直の外ニ少々継いたし候由、夫迄明日早朝出立^{ニ而}少々^{ニ而}も、終日漸可被登由、行程并四里斗と申聞候。

猶又いら沢村儀兵衛呼出し、山中の様子委敷相尋、以絵図面見分之手都合評定いたし候。

一、山中持参之用具并惣人足図り、米・塩・噌^(味噌カ)図り、無益之儀無之様考合可申付、伴左衛門・傳五右衛門^江申渡。

十日

一、五時過門前村登足、供廻り并従者左之通

十郎兵衛

伴左衛門

鏈持

安藏

草り取

傳五右衛門

草り取

杉左衛門

源藏

四郎右衛門

形助

与惣吉

門前村名主

新五郎

善右衛門

飯沼沢村同

兵左衛門

兵右衛門

忠三郎

獵師

甚之丞

山案内

市左衛門

八左衛門

津右衛門

門前組頭

彦兵衛

理右衛門

吉右衛門

有り、直しの外に少々継ぎいたし候由、それ迄明日早朝出立にて少々にても終日漸く登らるべき由、行程あわせて四里ばかりと申し聞き候。

なお又、いら沢村儀兵衛呼出し、山中の様子くわしくあい尋ね、絵図面をもって見分の手都合を評定いたし候。

一、山中持参の用具ならびに惣人足をはかり、米・塩・味噌をはかり、無益の儀これなきよう考え合せ申し付くべく、伴左衛門・伝五左衛門へ申し渡す。

十日

一、五時過ぎ門前村を発足す。供廻りならびに従者左の通り。

十郎兵衛

伴左衛門

鏈持

安藏

草り取

傳五左衛門

草り取

杉左衛門

源藏

四郎右衛門

形助

与惣治

門前村名主

新五郎

善右衛門

飯沼沢村同

兵左衛門

兵右衛門

忠三郎

獵師

甚之丞

山案内

市左衛門

八左衛門

津右衛門

門前組頭

彦兵衛

理右衛門

吉右衛門

飯沼年寄(尺取) 所右衛門 吉兵衛

人足五拾四人

村方カ山迄都合

人足五拾四人召連候

但勝手働之參仕村用達共

一、村老共申候者、是入谷といふ処迄壹里斗之内、道も廣、馬通用成候間、駄馬に鞍置て乗候様申候、駕籠ハ通り不申候旨、依之迎も歩行立可登心得付、其心遣無之様申付、直寺歩立而半てん・股引ヲ着し發足ス。いら沢村觀音堂而暫息ヲ入、先中付中谷村争論有りし向山等遠見して又出立ぬ。中処迄ハ少し向登り而横川也。河原ヲ行ク。夫除道ニ差掛リ、高下屈曲さまくて又半里斗行。入谷といふ。家四軒アリ。川向ハ日向といふ。家六軒斗アリ。其下川東ニ中谷といふ有り。家八軒アリ。右の入谷ヲ過て山の神の森あり。此所而小休して山の趣ヲ村老ニ問ふ。此先を洗佛といふ。往古觀音の出張アリし洩の由今ニ青々たる深洩なり。此觀音ハ木曾義仲奥之城の守本尊といふ由御尺一尺貳寸斗リ殊の外ニ靈驗あらたなる尊靈なり。今ハ瑞光寺の境内ニ安んじ奉りて近郷の尊崇他ニ越といふ。其先を御堂平といふ。往古此觀音安置の場ト云傳ふ。此

飯沼沢年寄 所右衛門・吉兵衛

人足五拾四人

村方カより山まで都合

人足五拾四人召し連れ候

但し勝手働きの參仕村用達共

一、村老共申し候は、これより入谷にいふ処まで一里ばかりの内、道も広く馬通用も成り候間、駄馬に鞍置きて乗り候様申し候。駕籠は通り申さず候旨、これにより迎も歩行立可登るべき心得に付き、その心遣ひこれなき様申し付け、直ちに寺より歩立ちにて、半てん・股引を着し發足す。いら沢村觀音堂にて暫し息を入れ、先に付き中谷村争論ありし向山等遠見して又出で立ちぬ。中処迄は少し向ひ登りにて横川なり。河原を行く。それより除道に差し掛かり、高下屈曲さままにて又半里ばかり行く。入谷といふ。家四軒あり。川向うは日向といふ。家六軒ばかりあり。その下、川東ニ中谷というあり。家八軒あり。右の入谷を過ぎて山の神の森あり。ここにて小休して山の趣を村老ニ問ふ。この先を洗仏といふ。往古觀音の出張ありし洩の由、今に青々たる深洩なり。この觀音は、木曾義仲奥之城の守り本尊という由、御尺一尺式寸ばかり殊の外ニ靈驗あらたかなる尊靈なり。今ハ瑞光寺の境内ニ安んじ奉りて、近郷の尊崇他ニ越ゆといふ。その先を御堂平といふ。往古この觀音安置の場ト言ひ伝ふ。ここ御立山の入口なり。西をよきとき沢とい

所御立山の入口也。西ヲよきとき沢といふ。南江向て東を蛙平といふ。兩所共ニ村山也。東を小長戸・大長戸・鷺岩と云是等殊の外峻岨に見ゆ。西を浦沢・瀬戸沢・是等も最峻岨也。此瀬戸沢の口ニ而小休す。是迄千尋の岩壁ニ而道の幅漸く貳寸ニ足らず、所ニ依りて木の根・岩の角ニ手を掛越行也。夫ハ道缺といふ。此所少々平らニて、古、木師住（地以下同じ）し処の由、当時は炭竈貳つ立て年中燈を明す由、此辺所々ニ炭竈多く、其の岩の根・彼の木の根ハ燈を立る。夫ハ丸山と云ふ岬ニ差掛り、山上江登る事貳町斗也。此所よりに至而難所多く、道とても無く、岩角を踏み木の根に取付漸々登る足の掛所を拵置テ流石ニ階子を登る如し。

入谷ニ而

分入む末はいつくと白雲の

八重立岸をけふや越らむ

山の名の長きを如何ニたとるまし

ひはらいふせき谷の下ニみち

夫より助蔵落しとて、岩壁の中央ヲ伝ふ処アリ、何様此所は極ニ難所ニ而跡を見返さハ其まニ落もすへき心地也岩間ニ角へ足の指を掛て岩角ニ取附継

ふ。南に向ひて東を蛙平といふ。兩所ともに村山なり。東を小長戸・大長戸・鷺岩といひ、これら殊の外峻岨に見ゆ。西を浦沢・瀬戸沢これらも最も峻岨なり。この瀬戸沢の口にて小休す。これ迄千尋の岩壁にて道の幅漸く貳寸ニ足らず。所ニ依りて木の根・岩の角ニ手を掛け越え行くなり。それより道缺といふ。ここ少し平にて、古木師住（地以下同じ）みし所の由、当時は炭竈貳つ立ちて、年中灯を明かす由、この辺所々に炭竈多く、その岩根、かの木の根より灯を立てる。それより丸山という岬ニ差し掛かり、山上へ登る事貳町ばかりなり。ここよりに至テ難所多く、道とても無く、岩角を踏み、木の根に取り付き漸々登る足の掛け所を拵え置きて、流石ニ階子を登る如し。

入谷にて

分け入らむ末はいづくと白雲の

八重立つ岸をけふや越ゆらむ

山の名の長きを如何ニにたどるまし

ひはらいふせき谷の下ニみち

夫より助蔵落しとて、岸壁の中央を伝ふ処あり。何様此所は極めて難所にて、跡を見返さば其のまニ落ちもすべき心地也。

足_ニ渡る事式拾間斗、此所古助蔵といふ山住落て死
といふ依之名とす、上よりハ岩石をひききり下ハ
数千丈のさべ岩_ニ谷底を川水流れて、石_ニ逆まく
気色誠_ニ奇異の思をなして渡り行、従ふ人々かくて
は中々登山、覚束なし村老の嘶_ニ聞し_ハ危難の場
所といふ_ニ依て左ないふそ。

君の命ハ泰山より_ニ重しとやらかくそとて此所を引
返さんも本意_ニあらず、手足のつゝかんたけハ伝ん
と伝行ハ長五郎太とて少し平なる窪_ニに出て此
所_ニ暫疲を休む、むかし長五郎と_者此所_ニ山神_ニ
投られ死スといふ此所を箱淵とて潭々たる深淵ア
り夫_ハ河原小屋といふ_ニ下る此処ハ岩の階子_ヲ下る
古とし去ながら助蔵落程の極難もなく向へ向ひて
下る事能ハス跡ひさり_ニ下る。足壺を附夫_ハ跡掛_或
ハ木の根_ニ取付下る此所河原小屋といふ此_ニ昼食、
木師の小屋あり。夫_ハ又此所_ハ西_ニ向て行岩根_ニ上
り木の枝を伝ひ小袋岩・大淵・長くろ淵・大くろ
淵・ふつたり坂などいふ処_ヲ越て東ハ大洞・小沢・
ふつとり坂の名所あり此所_ニ川東_ニ移り和泉小屋
といふ木師_の小屋_ニ小休す。西の方は岩尾沢・道
の尾沢等見ゆ石あらし・ふつたり沢等見ゆ此を越

岩間 角へ足の指を掛けて岩角に取り付き、継ぎ足に渡るこ
と式拾間ばかり、この所_ニ古_ハ助蔵_{といふ}山住落て死すといふ。
これに依り名とす。上よりは岩石をひききり、下は数千丈のさ
べ岩にて、谷底を川水流れて、石に逆まく気色誠に奇異の思
をなして渡り行く。従ふ人々、かくてはなかなか登山、覚つか
なし。村老の嘶_ニ聞きし_ハよりも、危難の場所といふに依りて左
ないふぞ。

君の命_ハ泰山よりも重しとやらかくそとて此所を引き返さんも
本意_ニあらず、手足のつづかんだけは伝はんと伝ひ行けば長五
郎太とて少し平なる窪みに出て此所にて暫く疲れを休む。昔長
五郎とは此所にて山神に投られ死すといふ。この下を箱淵とて
潭々たる深淵あり。夫より河原小屋といふに下る。岩の階子を
下ることし。さながら助蔵落とし程の極難もなく向へ向ひては
下ること能_ハず、跡ひさりに下る。足壺をつけ夫へ跡掛、ある
いは木の根に取付き下る。

此所河原小屋といふ。これにて昼食、木師_の小屋あり。夫より
又此所より西へ向ひて行く、岩根に上り木の枝を伝ひ小袋岩・
大淵・長くろ淵・大くろ淵・ふつたり坂などいふ処を越えて、
東は大洞・小沢・ふつとり坂の名所あり。此所にて川東へ移り
和泉小屋といふ木師_の小屋にて小休す。西の方は岩尾沢・道の
尾沢等見ゆ。石あらし・ふつたり沢など見ゆ。此れを越へて小

て小垂沢の下、柳小屋と云所_ニいたる此所此度は宿
処と極め九尺四方程宛の木の皮_ニ四方を囲ひ屋根
も同じ皮_ニふきたる小屋三ツ掛させて、ものはい
たるかまとを立させける、是迄の道筋中々筆紙_ニも
尽し難し。岩根或は山の平を横_ニつたひ道とハ云な
から幡_ニ漸_ニ耆尺斗の処もあり又は足つほのみあり
て上ハ古木生茂りて空を見ず日輪の影茂一向見へ
ずして分り難く下は清流淡立_テて岩間_ニむせふ行程い
か斗ト里人_ニ尋るに門前村よりは是迄三里半余りとい
ふ然共難所のみ渡る故平常の道の五里余りも行し
心地也。時のころも如何と日時計取出し見るに八
時過_ニ到るに暫從者の足を休めいまだ日も高し大瀨
沢の中彼の名にあふ大瀨迄何里斗可有か、日のあ
る内に帰れずバけふ往て見へしかハ評定し、又よ
し登るへき用意を申付侍る。此度は極難中々容易_ニ
越へき事_ニ非すと村老共申_ニ因て、供の者共ハ残ら
す刀をおき、大脇差耆本帯させ、自分_ニ身拵改て
刀ハ從者_ニ持たせ、里民の案内を先_ニ立て又打立ぬ。
唐沢の口・大たるの口出合_ニ南_ニ向て川_ニ□_ニひ攀登
るに、岩石甚多く這登り這下り、岩間_ニ木の枝を立
て夫_ハ取付越る所もあり、洩共_ニも多く奇石共出

垂沢の下、柳小屋といふ所に至る、此所此の度は宿所と極め、
九尺四方程づつの木の皮にて四方を囲み屋根も同じ皮にてふき
たる小屋三ツ掛させて、ものはいだるかまとを立てさせける。
是れ迄の道筋、なかなか筆紙にも尽し難し。岩根或は山の平を
横につたひ道とは云いながら、幡漸やく一尺ばかりの処もあり
又は足つほのみありて上は古木生ひ茂りて空を見ず、日輪の影
も一向見へずして分り難く、下は清流淡立_チて岩間にむせぶ。
行程いかばかりと里人に尋ねるに門前村よりは是れ迄三里半余り
といふ。然れ共難所のみ渡る故平常の道の五里余り行きし心地
也。時の頃も如何と日時計取り出し見るに、八ツ時過に到るに
暫く從者の足を休め、いまだ日も高し、大瀨沢の中、彼の名に
あふ大瀨迄、何里ばかり有るべきか、日のある内に帰れずば、
けふ往きて見へしかハ評定し又よじ登るべき用意を申し付け侍
る。此の度は極て難所なかなか容易に越べき事に非ずと村老共
申すに因りて、供の者共は残らず刀をおき、大脇差耆本帯させ、
自分も身拵_ニ改めて刀は從者に持たせ、里民の案内を先_ニ立て
て又打ち立ちぬ。

唐沢の口、大たるの口出合より南に向かひて川に□_ニひ攀登
るに、岩石甚だ多く這ひ登り這ひ下り、岩間に木の枝を立てそ
れより取り付き越へる所もあり、洩共にも多く奇石共出張りて
行き難き所もあり、山へ登りてそれを越へ行く。がきかのどと

張面行き難き所茂あり、山江登りて夫を越行。がきかのどといへる大淵に至る。是迄川ニ添て来る中ニ茂、中々きゝしに勝りたる嶮難有りて、行なやむ事度々なり。里民共茂、此谷は山中一の切所ニて行なれたる者茂跡江見かへる事能ハす、先の事も知らぬ場あるよし申付き。此淵先江行ニ両岸峨々たる岩石横ニ聳て、岩石ニ包たる淵故ニへつるへき所も無し。依而右の方の岩壁江登る事六拾間斗、是茂甚き岩崖いわきにて人の多く登らハ石の落ん様子もあり。依て両三人程ツゝ切て登るべしとて、下の河原ニ人を留め、案内を先ニ立て岩の鼻を跡歩ませ取付て登る。誠ニ九分心ふはいニ跡へふりむけハ其まゝ落へき心地ニて、先江登る人の足斗を目当ニ、定式の足つぽ先行へき様なし。一足踏違は進退其まゝ極るへき躰なり。夫先横ニつとふ事式町余の間至而急々ニして、手を連るがごとく成。岩の平中央に幅三寸・五寸斗の割目あり。夫を足掛りにして木根・岩角江取付、継足ニ行く。又下るニも其如くして川岸ニ下り立てハ、大瀧江程近し。此へつりを渡る中は、誠ニ危難是ニ止り生たる心地も無之。たまく少の足たまりある所ニて下を見れば、千尋の水壁そハ立て谷底ニ潭々たる

いへる大淵に至る。是迄川に添ひて来る中にも、中々きゝしに勝りたる嶮難有りて、行なやむ事度々なり。里民共も、此の谷は山中一の切所にて行きなれたる者も跡へ見かへる事能はず、先の事も知らぬ場あるよし申し付き。此の淵より先へ行くに、両岸峨々たる岩石横に聳へて、岩石に包みたる淵故にへつるべき所も無し。依りて右の方の岩壁へ登る事六拾間ばかり、是も甚だしき岩崖いわきにて人の多く登らば石の落ちん様子もあり。依りて両三人程づつ切りて登るべしとて、下の河原に人を留め案内を先に立てて岩の鼻を跡歩ませ取り付きて登る。誠ニ九分心ふはいにて跡へふりむけば其のまゝ落つべき心地にて、先へ登る人の足ばかりを目当にて、定式の足つぽより行くべき様なし。一足踏み違えば進退其のまま極まるべき躰なり。それより横につとふ事式町余の間至つて急々にして、手を連ぬるがごとくなり。岩の平中央に幅三寸・五寸ばかりの割れ目あり。それを足掛かりにして木の根・岩角へ取り付き、継ぎ足に行く。又下るにも其の如くして川岸に下り立てば、大瀧へ程近し。此のへつりを渡る中は、誠ニ危難是に止まり、生きたる心地もこれ無し。たまたま少しの足たまりある所にて下を見れば、千尋の水壁そば立ちて谷底に潭々たる深淵泡淡を吹き出し、四方に岩石囲みて水底の程を知らず。式間半の材木も落ち込むと半時はかりは出ざる由承りぬ。

深淵淡を吹出し、四方^ニ岩石圍て水底の程を知らず。
式間半の材木^茂落込と半時斗は不出由承りぬ。夫^ハ
大瀧^ニ到る^ニ川水を左右^江渡る事六度にして瀧の下^ニ
のぞむ。はや十五・六間前^ハ飛沫袖をしめし澤水身
掛るが如し。東^ハ落る瀧ハ水かさ高遠の藤沢川程斗
一すじ^ニ落て、岩壁を離て落ける。高サ廿間斗なり。
其上^ニ式丈斗と十間斗の瀧二段アるよし、下^ハ見
へす。中々登りて見ん^ニ登るへき様なし。外山^ハ
廻りて行け^ハ見るよし。瀧つほのふち^ハ七・八間上
りて、瀧水の中^ニ釈迦つむりと言^{（給あり）}□如斯岩あり。夫
^ハ大瀧を打^ハけ四方^江ちる事凡六・七間、岩間壺
盃^ニ落る也。八・九間、向ふの岩壁^江つたひ行は、
忽ち飛沫^ニ濡て雷雨^ニ逢ふか如し。西^ハ落る瀧は水
かさ右の三か一なり。高き事ハ凡五拾間斗あるへく
見へて数段^ニ落来る気色^至而絶景也。此瀧ハ左の方
を登ら^ハ登るへき様子なり。依て登るへきと申あへ
るに案内の者頻^ニ留て中々以て登るへき所^ニあらず。
半ふ□^{（ふ）}へ行ハ瀧壺^江のそきたる如く決^而登られす。
下^而足壺遠くして極難也といふ。何様岩壁四方に
□^{（か）}こんて、渡り十間斗壺のことくなる所へ両方^ハ瀧
水落込^而如何^ニけハしき勢也。瀧の近辺ハ風^至而冷々

それより大滝に至るに、川水を左右へ渡る事六度にして滝の
下^にのぞむ。はや十五・六間前より飛沫袖をしめし澤水身に掛
かるが如し。東より落ちる滝は水かさ高遠の藤沢川程ばかり一
筋に落ちて、岩壁を離れて落ちける。高き廿間ばかりなり。そ
の上に式丈ばかりと十間ばかりの瀧二段ある由、下よりは見へ
ず。中々登りて見んにも登るべき様なし。外山より廻りて行け
ば見へる由。滝壺のふちより七・八間上りて、瀧水の中に釈迦
つむりと言^{（給あり）}□かくの如き岩あり。それより大瀧を打ち^ハけ四
方へちる事凡そ六・七間、岩間壺杯に落ちるなり。八・九間も
向こうの岸壁へつたひ行けば、忽ち飛沫に濡れて雷雨に逢ふが
如し。西より落ちる瀧は水かさ右の三か一なり。高き事は凡そ
五十間ばかりあるべく見へて数段に落ち来たる景色至つて絶景
なり。此の瀧は左の方を登らば登るべき様子なり。依つて登る
べきと申しあへるに案内の者頻りに留めて中々以て登るべき
所にあらず。半ばふるへ行けば、滝壺へのぞきたる如く決して
登られず、下がっても足壺遠くして極難なりといふ。何様岸壁
四方にかこんで、渡り十間ばかり壺のごとくなる所へ、両方よ
り滝水落ち^込みて如何にもけはしき勢いなり。瀧の近辺は風^至
て冷々しく、身の毛もよだつといふべし。人々心細き心地なり
とぞ申し合へり。それより又前の嶮岨を凌ぎて帰りぬ。

七つ半時頃柳小屋に戻りて、今日は誠に命をひろいしとて笑

しく身の毛もよたつといふへし。人々心細き心地也とそ申合り。夫ハ又前の嶮岨を凌て帰りぬ。七半時頃柳小屋ニ戻て今日は誠ニ命をひろいしとて笑ひあへる。此嶮岨の趣何程ニも紙筆ニ尽しかたく覺侍る。

大滝ニ

いかにして鳥もかけらん千尋ある

岩ニさかまく瀧のしらなみ

山小屋ニ十二洞を越て来りし事を思出して

右ニ六重左ニ六重の山越て

今はましらの影さへも見ず

一、朶の小屋ニ到て皆々一宿の用意して細屋のつかれを休め、又明日の道筋評議など申付、村老共山師共召集て山内の様子を尋るに諸木多しと言ふ中ニも榎・栂・桂・唐檜多く有之、其外は雑木のミ、ぶな・どろぼう・さるすへり等多く、栗・松・しらびそ等ハ一向ニ無之。桧・榎・くろへハ少々有之候とも此類ハ兎角熊むき・さるむき多、枝木皮入等になりて用立候木少々の由。大たる・から沢等ハ木沢山ニあれ共出しかた無之、出水等て善出して十か一は用立ぬ由、兎角嶮岨多く高山故ニ瀧々

ひあへる。この嶮岨の赴き、何程にも筆舌に尽くしがたく覺侍る。

大滝にて

いかにして鳥もかけらん千尋ある

岩ニさかまく瀧のしらなみ

山小屋にて十二洞を越て来たりし事を思い出して

右ニ六重左ニ六重の山越て

今はましらの影さへも見ず

一、朶の小屋ニ到って皆々一宿の用意して細屋のつかれを休め、又明日の道筋評議など申し付け、村老共山師共召し集めて山内の様子尋るるに諸木多しと言ふ中にも縦・栂・桂・唐檜多く有りて、其外は雑木のみ。ぶな・どろぼう・さるすへり多く、栗・松・しらびそ等ハ一向ニこれ無し。桧・榎・くろへは少々これ有り候とも此類は兎角熊むき・さるむき多、枝木皮入等になりて用立候木少々の由。大たる・から沢等は木沢山ニあれ共、出しかたこれ無く、出水等で善く出しても十か一は用立たぬ由。兎角嶮岨多く高山故ニ瀧々岩々に当たりて木の損する事多分にて、皆さけ損して出し難き由、其上奥山故ニ七、八日も泊まり掛けに來りて伐り出し出水を待てかり下しても、やゝも

岩々に当りて木の損する事多分^ニ皆^ニさけ損して出し難き由、其上奥山故^ニ七、八日^茂泊掛^ニ来^ニ而^ニ伐出し出水を待てかり下して^茂やゝもすれハ出しかた十二、三日^茂掛りて渡世^ニならずといふ。日向山の方は往昔残らず焼たる由、木^ニ茂立かねるといふ。日数十二日昼夜焼しと言伝ふよし。

一、六半時頃登山之要具を調へ人数を揃えて唐沢の方^江打出ぬ。小たる沢の口を過て向ふを見れば、数千丈の岩壁高く聳へ渡り^茂十町斗と見へて、生きさる^茂如く又落かゝるかとし。是は何とか云ふと案内^ニ問ふに佛谷とて一枚の岩山也。下^茂も上^茂も此平^ニ到^ニこと能^ハすといふ。其岩根を傳いて川を越山^江登攀登る。右之方を出から沢・中唐沢・かつさりほの名所あり、何^茂嶮山也左の方ハ佛谷・きハた落し・かんべら沢・ここミ沢等の名所あり、何れ^茂嶮山^ニ而^ニ此川は多分岩山也。依^ニ而^ニ見ることなる瀧共沢々にあり、此こ見沢を分るに始^ハ外^ニか^ハる事^茂無く、此唐沢の中^ニは随分登り安き沢の由案内の者申侍る。中頃^茂岩壁^ニ差掛り上を見れば、岩壁をいきさ^茂り落かゝることし。誠^ニ八分^ハはらいの山^ニ而^ニ至^ニ而^ニ急なり。夫を直直^茂登る事二十町斗中

すれば出し方十二、三日も掛りて渡世にならずといふ。日向山の方は往昔残らず焼たる由、木にも立ちかねるといふ。日数十二日昼夜焼けしと言伝ふよし。

一、六半時頃登山の要具を調へ人数を揃えて唐沢の方へ打ち出でぬ。小たる沢の口を過ぎて向ふを見れば、数千丈の岩壁高く聳え渡りも十町ばかりと見へて、生きたる如く又落ちかかるがごとし。是は何とか云ふと案内に問ふに佛谷とて一枚の岩山なり。下よりも上よりも此の平に到ること能はずといふ。其の岩根を伝ひて川を越へ山へ登り攀じ登る。右の方を出から沢・中唐沢・かつさりほの名所あり。何れも嶮山なり。左の方は佛谷・きはた落し・かんべら沢・ここみ沢などの名所あり。何れも嶮山にて此の川は多分岩山なり。依つて見ごとなる瀧ども沢々にあり。此のこ見沢を分けるに始めは外にかはる事も無く、此の唐沢の中には随分登り安き沢の由、案内の者申し侍る。中頃より岩壁に差し掛り上を見れば、岩壁をひききり落ちかゝるがごとし。誠に八分はらばい^ハの山にて、至つて急なり。それを真直に登る事二十町ばかり中頃に休むべき足たまりもなく、岩の角々に大勝斗を掛けて角に取付き始終梯子を急に登るがごとし。足よりも手の方にて登る様に覚ゆ。九分目頃に到つて這竹

頃^ニ休むべき足たまり^茂なく、岩の角いして大
勝斗^{マツ}を掛けて角に取付始終階^階子を急^ニ登るかとし。
足^も手の方にて登る様^ニ覚ゆ。九分目頃^ニ到て這
竹とて直竹^直の様^ニ細く竹の六尺斗なるか四方へ這迫
り押分けて^茂分ち難く、打越んもかたき所を無二無
三^ニ押分け伐明て登る事三四町にして絶頂^ニ出る。
此所なきつら共云ふ。キャウガ嶽の北^ニて八分目^ニ
当り今少し登らハ岳の頂^ニも到るへし。往んと思
立け共里民共頻^ニ留て中々日のある中^ニ頂迄出すへ
からず、峯通ハ椽の木横に這て足を踏へき所なく、
平へ出ハ岩壁そハ立決て通し難しといふ。此九分
目^ニさんハふり池と云ふ少の浪水あり、是迄登りて
雨を請ふ^ニいか成干ばつにも一時の雨到らずと云ふ
事なし。乍去能々水^ニかつへハ格別一通り^ニハ行
かたく、誠^ニ命を掛けて行事故村中^ニも行たる人稀也。
先年大干撥^撥の時^茂唐沢の峯迄ハ五七人到て雨をこ
ふ、然共ふらず。依^而いら沢村の儀兵衛と云者到て
別段なる不敵者なれば此池に到て水をかき立跡ち
らしたれば、暫時^ニ雨ふり震音と、るきて里迄もし
めりを得たりと云ふ。此儀兵衛此度^茂案内^ニ登りて
直々正き物語を聞き。唐沢の峯^ニて人声すれば雨天

とて、真竹の様に細く竹の六尺ばかりなるが四方へ這い迫り押
し分けても分ち難く、打ち越えんもかたき所を無二無三に押
分け伐明けて登ること三四町にして絶頂に出る。此の所なきつ
ら共云ふ。キャウガ嶽^嶽の北^ニて八分目に当り今少し登らば岳の
頂にも到るべし。往かんと思立ちけれ共里民共頻りに留めて
中々中日のある中に頂迄出ずべからず、峯通りは椽の木横に這
て足を踏むべき所なく、平へ出れば岩壁そば立ち決して通し難
しといふ。此の九分目にさんはふり池と云ふ少しの浪水あり。
是れ迄登りて雨を請ふにいかなるかん^干ばつにも一時の雨到らず
と云ふ事なし。さりながら能々水にかつえば格別一通りにては
行きかたく、誠に命を掛けて行く事ゆえ村中にも行きたる人稀
なり。先年大干魃の時も、此の唐沢の峯迄は五七人到て雨を
こふ、然れ共ふらず。依^{つて}いら沢村の儀兵衛と云ふ者到て
別段なる不敵者なれば此の池に到て水をかき立て跡ちらした
れば、暫時に雨ふり震音とどろきて里迄もしめりを得たりと云
ふ。此の儀兵衛此の度も案内に登りて直に正しき物語りを聞け
り。唐沢の峯にて人声すれば雨天と云ふ事にて、けふも雨具を
用意せしが、昼間は雨もふらず夜に入りて暮時頃より頻りに雨
そぼふりて、唐沢より柳小屋の邊迄ふり侍りぬ。里民共何時登
りても、是非少しは雨ふらずといふ事無しといふ。

此の峯にて暫く息を入れ、昼の支度して、四方を遠眼鏡にて

と云事^ニ而^レけふも雨具を用意せしが昼間ハ雨もふらす夜^ニ入^ル而^テ暮時頃^ハ頻^ニ雨そほふりて、唐沢^ハ柳小屋之邊迄ふり侍りぬ。里民共何時登りても、是非少しハ雨ふらすと言事無しといふ。此峯^ニ而^テ暫息を入昼のしたくして、四方を遠眼鏡^ニ而^テ見る見西^ハ木曾谷^ニ并らひ・やご原・福島邊眼下^ニ見ゆ。向ふハ小木曾・御嶽等見ゆ。南^ニ当りて山間^ハ海上ありく^ト見ゆ。是は定^ニ而^テ名小屋の浦なるへし。北ハ松本の^ハ眼^下見ゆ。東ハ山^ニ当りて見へす、地藏ヶ嶽・八ツ嶽等見ゆ。夫^ハ又打立てがつさりの絶頂^ニ到りて見れば、きゃふか嶽と大方同様の高サ^ニ見ゆ。是^ハ尾州領の御巢山につくはげ山也、御巢山^江は年々境目見分来りて分杭を打由承りける^ニ由て、人を遣し見るに去年は野呂源六と言人登りし由、立木^ニ記しあるよし申侍る。此度も此処^江左之通り分杭認立置

寛政十一己未年六月十一日郡代岡村十郎兵衛、代官伊藤安藏、山方小林杉左衛門為見分登山

夫^ハ峯づたひ^ニ出唐沢の奥^ニ到る。是迄一里余の処不殘這竹^ニ而^テ到て重り合先へ行く人を見失ふ程也。其中を押分く^ハ椈、柺立しげりたる木の下やミを

見るに、西は木曾谷に并らひ(奈良井)・やご原(やぶ原)・福島辺眼下に見ゆ。向ふは小木曾・御岳など見ゆ。南に当たりに、山間より海上ありありと見ゆ。是は定めて名古屋の浦なるべし。北は松本ののづら眼下に見ゆ。東は山に当たりに見へず、地藏ヶ嶽・八ツヶ嶽など見ゆ。夫より又打ち立ちてがつさりの絶頂に到りて見れば、きゃふか嶽(経ヶ岳)と大方同様の高さに見ゆ。是より尾州領の御巢山につづくはげ山也。御巢山へは年々境目見分来たりて分杭を打つ由承りけるに由つて、人を遣し見るに、去年は野呂源六と云ふ人登りし由、立木に記しあるよし申し侍る。此の度も此処へ左の通り分杭を認め立ち置く。

「寛政十一己未年六月十一日 郡代岡村十郎兵衛・代官伊藤安藏・山方小林杉左衛門見分の為登山」

夫より峯づたひに出唐沢の奥に到る。是迄一里余の処残らず這竹にて到つて重なり合ひ、先へ行く人を見失ふ程也。その中を押し分け押し分け椈・柺立しげりたる木の下やみをたどり行きて唐沢の岸に至り、夫より此の尾崎を下りし。是又這竹生しげり前後の人も見へがたく、足本はすべりては倒れ又竹にからみては往くこと能はず。漸く伐り明けて行く事式里余にして小樽沢の口に下る。此の口は始終這ひ上り這ひ下りて直に歩き行く

たとり行て唐沢の岸に到り、夫此尾崎を下りし、是又這竹生しけり前後の人も見へがたく、足本はすへりてハ倒れ又竹からミテハ往事能ハス。漸く伐明て行事式里余して小樽沢の口に下る。此口は始終這上り這下りて直歩行事甚少し、暮時前柳小屋に着て又此夜も爰に夜を明し侍る。又明日は小沢の峯に登而向山之谷々見分し侍んと評議せしか此小沢は到つて岩山に登る事難く、其上喬木しげり合一向に遠見もならざる由、案内の申ハさあらハ往て見んと此邊迄大方は唐沢の峯に谷々洞々も眼下に見へて、一洞づゝの見取繪図も出来せし事なれば、明日ハ本沢の町間を改て沢々の方角をふり當なから下りて繪図の面正真を顕し、永々の重宝に備んとて評議を定む。此夜は月至清光、森々たる木の間にさし入影の物過く又冷々覺侍る。

ましらさへ住ぬ深山の奥迄も

月はかはらぬ影のすゝしさ

里遠く分入山の奥に又

すむ影すこき夏の夜の月

十二日

一、五半時頃、柳小屋を踏出して、元来りし道を

事甚だ少し。暮時前柳小屋に着いて、又此の夜も爰に明し侍る。又明日は小沢の峯に登って向山の谷々を見分し侍らんと評議せしが、此の小沢は至つて岩山にて登る事難く、その上に喬木しげり合ひ一向に遠見もならざる由案内の申すにては、さあらば往て見んと此の邊迄大方は唐沢の峰にて谷々洞々も眼下に見へて、一洞づつの見取り繪図も出来せし事なれば、明日は本沢の町間を改めて沢々の方角をふり当てながら下りて、繪図の面正真を顕し、永々の重宝に備へんとて評議を定む。此の夜は月至つて清光にて、森々たる木の間にさし入る影の物凄く又冷々覺侍る。

ましらさへ住まぬ深山の奥迄も

月はかはらぬ影のすゝしさ

里遠く分け入る山の奥に又

すむ影すこき夏の夜の月

十二日

一、五半時（午前九時）頃、柳小屋を踏み出して、元来りし道

門前村の方^江帰りながら沢々・谷々の方角をふり付、道の町間改めて、登りし時のことく岩根・木の枝をつたひつつ浦の沢入口迄下り、是^ニ昼食して又下り待るに、入谷の奥迄迎の由にて、馬鞍置て村方^舟出し置けるに打のり、七時過頃^ニ漸門前村^ニ着す。又瑞光寺^ニ宿を求む。

一、少しつかれを休て、直^ニ絵図の分間を改させ、五間老歩の図りを以て道法を定め、兎角する中^ニ夜^茂深けぬれば、明日の事^ニ可致と申付る。左候^而は覚束なしとて、夜もすがら下絵を付、鳥の八声も打過^而打臥ぬ。此本沢の道のり改^而沢の内壱里廿四五町と見ゆ。門前村^舟大旨三里と見ゆれ共、山谷難所を渡る故^ニ五里余と思はる也。終日かかりて漸く門前村^江到る。

十三日

一、きのふの下絵^江彩色を入、名所^くを書き加へ、不分明所ハ村里の案内者^ニ尋て委細^ニ記し、見取の絵図と引合^而分間の絵図を仕立てるに、長日なから日も長けて末の刻斗^ニ認終りぬ。夫^舟直^ニ打立て此夜^者羽場村^ニ宿申付侍る。

銀子壺両 瑞光寺^江

を門前村の方へ帰りながら沢々・谷々の方角をふり付け、道の町間改めて、登りし時のごとく岩根・木の枝をつたひつつ浦の沢入口迄下り、是に昼食して又下り待るに、入谷の奥迄迎への由にて、馬鞍置きて村方より出し置きけるに打のり、七時(午後四時)過ぎ頃に漸く門前村に着す。又瑞光寺に宿を求む。

一、少しつかれを休めて、直に絵図の分間を改めさせ、五間老歩の図りを以て道法を定め、兎角する中に夜も深けぬれば、明日の事に致すべしと申し付ける。左候ては覚束なしとて、夜もすがら下絵を付け、鳥の八声^{やこえ}も打ち過ぎて打ち臥しぬ。此の本沢の道のり改めて沢の内壱里廿四五町と見ゆ。門前村より大旨三里と見ゆれ共、山谷難所を渡る故に五里余と思はるなり。終日かかりて漸く門前村に至る。

十三日

一、きのふの下絵へ彩色を入れ、名所^くを書き加へ、不分明のところは村里の案内者に尋ねて委細に記し、見取の絵図と引合せて分間の絵図を仕立てるに、長日ながら日も長けて末の刻(午後二時)ばかりに認め終りぬ。それより直ちに打ち立ちて此の夜は羽場村に宿申し付け侍る。

銀子壺両 瑞光寺へ

数々臨時の世話に預り候に付き

数々臨時の世話ニ預り候ニ付

酒代三百文 飯沼沢村名主 兵左衛門

同 式百文 門前村 同 新五郎

山中骨折深切相勤候ニ付、

右物書を以て差置候。尤急と遣すと云ふニ茂無之儀ニ
自分ハ遣ス段演説致候。

一、羽場村江暮時前着宿。 覚左衛門

一、昨日下山之際、門前村の儀者両村共ニ山中多人

足申付候ニ付、上嶋村・今村・宮所村江迎え人馬申

付、羽場村江泊り宿申付置候様安蔵江申渡。是ハ高

遠迄人馬羽場・北大出両村江申付置候処、組合ニ付

新町・宮所ハも差出候由安蔵江申聞候。

一、御立山十二洞之儀者絵図面ハ委鋪分間を認め付

是ニもらず。此記を以て絵図ニ望まハ委細可分、尤

林木・奇石等委敷記す事能ハす。多分ハもらし十ハ

二三をあぐ。

十二洞名所は左之通

日向かわ (鋪 沢 瀬戸沢 岩尾沢)

道之尾沢 小垂沢 唐 沢

日影かわ (小長谷沢 大長谷沢 大洞沢)

黒 沢 小 沢 大瀬沢

酒代三百文 飯沼沢村名主 兵左衛門

同 二百文 門前村 同 新五郎

山中骨折深切相勤め候に付き

右物書を以て差し置き候。尤もきつと遣すと云ふにもこ
れ無き儀に、自分より遣す段演説致し候。

一、羽場村へ暮時前着き宿す。 覚左衛門

一、昨日下山の際、門前村の儀は両村共ニ山中多人足申し付け

候に付き、上嶋村・今村・宮所村へ迎えの人馬申し付け、羽場

村へ泊り宿申し付け置き候様安蔵へ申し渡す。是より高遠迄人

馬羽場・北大出両村へ申し付け置き候処、組合に付き新町・宮

所よりも差し出し候由、安蔵へ申し聞き候。

一、御立山十二洞の儀は、絵図面より委鋪分間を認め付け是に

もらず。此の記を以て絵図に臨まば委細分かるべし。尤も材木・

奇石等委敷く記す事能はず。多分はもらし十が二、三をあぐ。

十二洞名所は左の通り

日向かわ (鋪 沢 瀬戸沢 岩尾沢)

道之尾沢 小垂沢 唐 沢

日影かわ (小長谷沢 大長谷沢 大洞沢)

黒 沢 小 沢 大瀬沢

十二洞、此の間小沢数多これ有り

十二洞、此間小沢数多有之。

十四日

一、五半時頃羽場村出立

一、今日駄荷馬共不残半乗ニ申付、供廻り之者兩人宛交代乗候様に伴左衛門_江申付る。

一、卯之木茶屋_ニ小休、茶代式百文為差置候。

一、八時前高遠_ニ着。直_ニ御用番孫右衛門殿_江罷越御届申達。山之様子委細明日罷出申達候_江申置候。

一、大目付中_江届手紙_ニ申遣ス。

一、同役中へも案内申遣ス。

十五日

一、今日御城_江罷出、山中之様子絵_江面を以て委細申達候。右絵_江面差出置

一、山中榎・榊・桂多く見へ榿・榊は少し。尤熊・猿等中段の皮をむき候由也。上木は不見当其外雜木品々有之栗は少し。しらびそ之種無之由、唐榿ハ少々有之。

廿日

一、洞油渋紙共、今日御武具方吟味方_江納候段義右衛門申聞候。

十四日

一、五半時(午前九時)頃、羽場村出立。

一、今日駄馬共残らず半乗りに申し付け、供廻りの者兩人宛交代乗り候様に伴左衛門へ申し付ける。

一、卯の木茶屋にて小休、茶代二百文差し置かせ候。

一、八時(午後二時)前高遠に着す。直に御用番孫右衛門殿へ罷り越し御届け申し達す。山の様子委細明日罷り出で申し達し候_江申し置き候。

一、大目付中へも届け手紙にて申し遣す。

一、同役中へも案内申し遣す。

十五日

一、今日御城へ罷り出で、山中之様子絵_江面を以て委細申し達し候。右絵_江面差し出し置く。

一、山中榿・榊・桂多く見へ、榿・榊は少し。尤も熊・猿等、中段の皮をむき候由なり。上木は見当たらす、その外雜木品々これ有り。栗は少し、しらびその種これ無き由、唐榿は少々これ有り。

廿日

一、洞(桐)油・渋紙共、今日御武具方吟味方へ納め候段、義右衛門申し聞き候。

「横川山巡覽記」について

赤羽 篤

『横川山巡覽記』は、高遠藩の郡代岡村十郎兵衛が、寛政十一年（一七九九）五月、藩主から上伊那郷の横川入り御立山（現辰野町）の見分を命じられ、総勢二十二人、馬六疋に準備万端を整えて六月八日に高遠を出発し、地元横川の村方より山までは都合人足五十余人を召し連れ、陰阻な横川山を詳細に見分記録するとともに、絵図面をも仕上げ同十四日高遠に帰着し、翌十五日に登城して提出したその復命書である。

この巡覽記の原本の所在については不明であるが、幸いに『落原拾葉続卷三十一』に所収されていたので、今日これによって読むことができる。しかし、この写本は誤字や当て字が多かったり、そのうえ字の大小が不揃いであったりして難解のところが多くなかった。

昭和二十八年に中村寅一氏は北村勝雄氏の指導を仰ぎながらこの読解に努め、ガリバン刷り小冊子にして有志に配り、これによって高遠藩の横川山見分ことが当時地元

人々にも知られるようになった。しかしそれさえも昔のこととなってきたので、辰野町公民館の古文書学習講座のテキストとしてこれを選び、古記録の読解力の向上にとめると共に、郷土の歴史学習にも資するようにと考え、平成四、五年度の二年間この書に親しんできたわけである。月一回の講座においては、身近な郷土の歴史書として興味深く読まれ、話題はいろいろに広がって、原文と読み下し文の原稿を完成するには結構二年間かかってしまった。しかし、その成果が「辰野町資料」としてまとめられた。そこで序でながら、二、三のことについて記してみたい。

まず第一に横川山についてであるが、古い時代のことは何も分かっていない。慶安四年（一六五二）に書かれた「保科家分限帳并国替見立之控」という記録の中に、豊臣秀吉の時代に、宮木村住人の矢島勘兵衛が横川山の榎木奉行をしていたということが見える。これによると、その頃横川山から榎の木が伐られて川下げされたのかもしれない。

やがて高遠藩成立後、何時から藩林として御立山になったのかそれも不明で、元禄三年（一六九〇）の横川村の検地帳に初めて御立山十二か所として、浦の沢を初め、いわゆる十二洞の地名だけが上げられ、「これは險阻ゆえ御検地に及ばず」と記されている。これは三峰川入御立山入会七か村の場合も全く同じである。そして、その後の年貢割付状によれば、地元横川村からは毎年木地役定納金を取り立てていたし、また特殊な入山者である木地師からも木地運上金を取り立てられていたことがわかる。このようなことから、高遠藩では鳥居氏時代には領内の山野の実態はまだよく把握されておらず、内藤氏時代になって藩の職制も整い、御立山へも次第に支配が進められるようになったものと思われる。御立山についての主なる見分を挙げると次のようである。

元文元年（一七三六）八月 駒ヶ岳

郡代 安藤太郎兵衛（駒ヶ岳一覧記）

元文五年（一七四〇）八月 三峰川入西山

郡代 三浦団右衛門

宝暦五年（一七五五）七月 三峰川入西山・前岳

郡代 阪本運四郎

宝暦六年（一七五六）八月 駒ヶ岳

郡代 阪本運四郎（後駒ヶ岳一覧記）

天明四年（一七八四）七月 駒ヶ岳

郡代 阪本 孫八（勒銘石）

寛政十一年（一七九九）六月 横川山

郡代 岡村十郎兵衛（横川山巡覧記）

文化十三年（一八一六） 三峰川入奥地

藩士 石川重左衛門（木御師林山絵図）

文政九年（一八二六）八月 三峰川入奥地

郡代 星野蒨・神波半太左衛門（御山方絵図）

これらの見分は郡代を隊長とし、多くの士卒と地元村民を動員して登山し、山地の地形や山境を確かめて分杭を打ったり、林相や草木の様子を調べ、山絵図を作ったりして復命書を提出している。

第二に問題にしたいことは、このとき木地屋が入山していたかどうかということである。横川山へ木地屋が入ったのはいつ頃から分らない。しかし、門前の瑞光寺に残っている元禄以後から始まる過去帳には、享保十六年（一七三三）から文政十三年（一八三〇）に至るまでの間に、木地屋たち五十一人の戒名が見られる。したがって、享保時代には既に入山していたことが分かるが、没年号順に見ると

享保・元文と続いていて、その後はずっと見えず、文化・文政となつてゐる。一方、横川山浦の沢の木地師の墓には天保二年建立の名号碑があり、これを記念に横川山の木地屋たちは他へ移つたものと考えられる。そうすると、享保から天保までの中間の時代は全く資料に欠けているわけだが、この横川山の見分はその時代に当たり、木地屋に関する記事が次の三か所に見られる。この文中からこの時木地屋がいたか、いなかったか吟味してみる事とする。

(一) それより道欠といふ。此処少し平にして古木師(地)住みし所の由、当時は炭竈二つ立て年中燈を明す由、

此辺所々に炭竈多く、

(二) 此処河原小屋といふ。此処にて昼食。木師(地)の小屋あり。それより又此処より西に向かつていく。

(三) 東は大洞・小沢・ほとり坂の名所有り。此処にて川東へ移り和泉小屋といふ木師(地)の小屋にて小休す。

道欠(みちかけ)には昔の小屋跡と崩れた炭焼竈の跡ばかり。河原小屋には木地屋がいたかどうか、とにかく小屋で昼飯を食べた。和泉小屋にも木地屋がいたかどうか不明、とにかく小屋で暫く休んだ。木地屋が住んでいたら何か記事になつた筈と思われるが、何とも決し難い。とにかく横

川山には享保以前頃から木地屋が入つていたが、元文以後いなくなり、文化以前の頃から再び木地屋の入山があり、それが天保の初め頃再びどこかへ去つたものと考えられる。

第三には、横川山の名所についてである。この紀行文には今日国指定の天然記念物となつてゐる浦の沢の出口の「蛇石」のことが出てゐない。往きには浦の沢を素通りにして瀬戸沢の口にて小休止、帰りには浦の沢口まで下り、ここにて昼食してまた下りとなるが、近くの蛇石のことに何も触れてゐない。この頃、蛇石はまだ発見されていなかったであろうか。大滝沢の大滝のことについては、気色至つて絶景なり、と細かに記されている。

また後述するが、この見分によつて作られた絵地図には、黒沢谷に「サンキウガタキ」と記されていて、当時この名がつけられていた事が分かる。ちなみに明治十年の『長野県町村誌』を見ると、大滝を「男女滝」、唐沢の滝を「七滝」、三級の滝を一名「竈滝」と述べ、名勝として「蛇石」を説明している。

第四には、「横川入御立山絵図」についてである。高遠町の「岩崎文庫 古文書・図書総目録」(昭和二十七年)によつて、この絵図が岩崎家に保存されていることはずつと前から知つてはいたが、なかなか拝見する機会も持てな

かった。ところが同家では、貴重な古文書類を平成五年正月に町の図書館へ寄贈され、高遠町図書館では早速それを整理されて、「岩崎家資料目録」を作り、一般の閲覧に供されることになった。このことをこの正月の新聞で読んだので、同図書館へ「横川入御立山絵図」も寄贈されたかどうか、そしてそれが閲覧できるかどうかを照会したところ、全く願ったり叶ったりの回答を頂いたので、早速三月末に茅野益穂氏とともに高遠図書館へ出かけた次第である。

絵図は二点あり、題名は同じく「横川入御立山絵図」で、原図とその縮図であった。

(一) 原 図

巡覧記では、下絵とも見取りの絵図ともいっている。大きさは縦二九〇センチ、横一五四センチ。折れ目は擦り切れて、ぼろぼろといってもよい。山や尾根は没骨法で墨をばかし、薄緑の地に彩色し、沢は白地、川は青、道は赤茶色。沢の名は漢字、所々の地名はカタカナ。日付を書いた小さな紙片が所々に貼ってあったわけだが、糊が効かなくなっってはげている。四隅に近い余白に、漢字で東・西・南・北を記してある。

ちなみに巡覧記の中から測量や作図に関する記述か所を上げてみる。



「上伊那郡横川入御立山絵図」(原図) 大滝沢・唐沢の部分

* 唐沢の峰にて谷々洞々も眼下に見へて、一洞づつの見取り絵図も出来せしなれば、明日は本沢の町間を改めて、沢々の方角をふり当てながら下りて、絵図の面正真を顕し永々の重宝に備えんと。

* 沢々谷々の方角を振り付け、道の町間を改めて、

* 絵図の分間を改めさせ、五間壹歩の図りを以て道法を定め、

(二) 縮 図

「横川入御立山絵図 六分一の絵図」と題名あり。縦二九〇センチ、横一五四センチ。

巡覽記の十三日、瑞光寺に泊まった翌朝は次のように記している。

* きのふの下絵へ彩色を入れ、名所名所を書き加え、不分明の所は村里の案内者に尋ねて委細に記し、見取りの絵図と引き合わせて分間の絵図を仕立てる。

つまり、見取りの絵図(原図)は、五間を一步の割合で書いたので、三千分の一の縮尺となる。分間の絵図とは縮尺・縮図のことで、原図の六分の一の絵図とは一万八千分の一の絵図ということになる。高遠町図書館の中村文彦氏のご好意により、この絵図をA3サイズ六枚にコピーしてもらって帰り、絵地図を復元することができた。同じ縮尺

ではないが、横川山地域について二万五千分の一の辰野町図と比べてみると、大小の谷々の位置やその方角はもちろん、地域全体の形までが凡そ似ていて、絵地図とはいえ二百年前にこれだけのものがよく書けたものだと感じさせられた。測量のことなどは前掲以外に具体的な記事はなく、町間は歩行の数や目測などで求めたものか、また道具や機械はどんなものが使われたのか皆目分らない。

しかし、これより先の宝暦六年(一七五六)の阪本連四郎の「駒嶽見分復命書」(後駒ヶ岳一覽記)を見ると、測量や作図に関した記事が遥かに多く、さすがにこれは砲術家や科学者らしい人の見分記としての特色が伺われる。この連四郎は三峰川入りの見分もしているし、その子の孫八(天山)は天明四年(一七八四)に郡代として駒ヶ岳登山を行っている。

「殿島年代記」によれば、この時岡村権左衛門とその子息がお供をしている。岡村家の系譜が詳らかでないので、名前が分からないが、年代から考えてこの子息というのが十郎兵衛と思われる。この岡村一家は天山門下であったわけである。十郎兵衛がこの時何歳であったか分からないが、天明七年に家督を継ぎ、高百二十石を与えられ、寛政元年(一七八九)武具奉行、同九年に郡代となり、十一年に横

川入御立山の見分を仰せ付けられたわけである。こうした

時代と人の流れを見ていくと、横川山の見分の隊長には岡村は適任者であり、山絵図の作成くらいは大したことではなかったと思われる。かの伊能忠敬が測量のため三河から伊那へ入ったのは、これから十二年後の文化八年（一八一一）のことであった。そして同十三年、高遠藩では石川重左衛門が三峰川奥地を調査し、翌年「木師御林山絵図」を作成している。これは横川山絵図より一層精細なものであった。藩の絵図面係であった石川は、宮所村の堀内嘉須美の五男として生まれ、十三歳で高遠藩士の竹入氏の養子となり、後に石川子温といふ数学が専門であったが、測量機を考案し、正確な地図の製作にも努めて有名であった。こうしてみると、高遠藩では御立山の見分にはその都度山絵図の作成をし、それによって測量技術や地図作成を大きく進歩させていることがよく伺える。そして、その地図作成に一貫して見られることは阪本天山の学統の活躍といえよう。山の中の小藩ではあったが、地図一つを通してみても、決して天下の学問に遅れてはいなかったと思われるのである。そうして「横川山巡覧記」もこうした時代の流れの中に位置づけて見ると、外郷の御立山の一見分として見過ごすわけには行かない歴史的意義を覚えるのである。

。追記

「横川山巡覧記」の岡村十郎兵衛の同勢中、代官伊藤安蔵の下役に岩崎源蔵の名が見える。この人が「石崎家資料」を寄贈された岩崎家の先祖で、その先祖はさらに豊臣末期の岩崎左門にまで遡るような旧家といわれるが、ことに高遠藩内藤氏時代後半の、次の岩崎氏三代は藩の重要事務に携わり、藩中の生き字引とまでいわれた程だったという。

宅右衛門吉忠 安永元年より文政五年まで五十一年勤仕。
源蔵（宅右衛門）寛政二年より嘉永二年まで六十年勤仕。

横川山見分に参加。

覚左衛門博秋 嘉永二年より廃藩まで二十三年勤仕。石川子温について数理・測量を究め、上伊那郷の代官も勤め、明治三年には山林奉行を勤めていた。そうした関係で、廃藩に際して殿様から古記録類などを頂戴したという。

また博秋の子の三蔵は自らこの古記録を整理し、「岩崎文庫目録」を作り、高遠藩政史研究に貢献した。それが今回三蔵の子息善信氏によって高遠町図書館へ寄贈されたわけで、「横川山巡覧記」の読み合わせを終わるに当たって感銘を覚える次第である。

（平成六年三月）

「横川山巡覧記」に記された植物

茅野益穂

私が、経ヶ岳・坊主岳周辺の調査をまとめた貴重な高遠

藩の報告書「横川山巡覧記」に初めて接したのは、辰野町誌編纂事業がスタートしたばかりの昭和五十八年（一九八二）夏のことであった。当時、辰野町誌編纂専門委員長であった赤羽篤氏から「高遠藩が横川山の見分登山をした時の記録があるが、その中に経ヶ岳・坊主岳周辺の植物の様子が出てくる。きっと参考になるだろうから一度目を通してらどうか」と届けられたのが、中村寅一氏が解読した謄写印刷の小冊子「横川山巡覧記」であった。私たち植物班では、早速これのリプリントして配り、以後三年連続して行った経ヶ岳・坊主岳植物調査の際には、極めて大事な資料として活用させて頂いた。

その後、この「横川山巡覧記」が所収されている「路原拾葉続卷之三十一」に直接当たってみたいと思うようになり、この「路原拾葉」原本を所蔵している高遠町図書館の中村文彦氏のご好意によって、この原本の複写の許可を得

て、待望の全文を手にすることができた。

さらに、時を経た平成四年度から町公民館古文書学習講座では、この巡覧記の解読を続けてきているとの事であったので、私も翌五年度からその仲間に加えさせてもらい、月一回の講座を楽しみしながら、再度の解読に挑戦できた。今回は最初から古記録としての「横川山巡覧記」の読解であったので、私が最初に中村氏の写本で自己流に読んだ時とは全く異なって極めて、正確なる読解であり、これまでの読み誤りや理解の出来なかつた点なども見事に解明され、本当に充実した講座であったと思っている。

今回そうした読解の成果が「辰野町資料」としてまとめられるという。郷土に今なお厳然として在る自然の姿の過去を、こうした形で知ることが出来るという点からしても、この企画は極めて有意義なものである。

「横川山巡覧記」の全容については赤羽篤氏による極めて的確な解説があるので、それにより承知してもらおうこと

にし、ここでは「横川山巡覧記」の文中に出てくる植物にしぼって少し触れてみる。まず最初にこの見分登山復命書に出てくる植物記載の部分を取り出しておこう。

さて、この見分登山の郡代岡村十郎兵衛一行は、寛政十一年（一七九九）六月八日に、総勢二十二人、馬六疋で高遠を出発し、翌九日には地元門前村の瑞光寺に着いている。ここで地元の村方より山までは都合五十四人を召し連れ、極めて峻峭な横川山見分登山を始めたのは六月十日のことであった。以後、「道筋筆紙に尽くし難し」というほどの難波を続けながら、見分登山を行い、再び地元門前村の瑞光寺に帰着したのは十二日のことであるが、実際に柳小屋をベースキャンプにして見分調査を行ったのは、六月十日、十一日の二日間であり、最後の十二日には、測量や作図を行いながら地元門前村の瑞光寺に帰着している。従ってこの「横川山巡覧記」で、植物観察に関する記述が見られるのも、この十、十一日の二日に限られ、都合四か所に次のような記述が見られる。

六月十日（調査第一日）

① 諸木多しという中にも、樅・榎・桂・唐松多くありて、そのほかは雑木のみ、ぶな・どろぼう・さるすべり等多く、栗・松・しらびそ等は一向にこれな

し。榎・榎・くるべは少々これあり候とも、この類はとかく熊むき・さるむき多く、枝木皮入り等になりて用立ち候木少々の由。

六月十一日（調査第二日）

② 九分目ころにいたって這竹とて真竹の様に細く竹の六尺ばかりなるが四方へ這い迫り、押し分けても分ちがたく、打ち越えんもかたき所を無二無三に押し分け伐りあけて、登ること三、四町にして絶頂に出る。

③ 峰通りは樅の木横に這って足を踏むべき所なく、
④ これまで一里余の処残らず這竹にて、いたって重なり合い、先へ行く人を見失うほどなり。その中を押し分け押し分け樅・榎立ちしげりたる木の下やみをたどり行きて、唐沢の岸に至り、それよりこの尾崎を下りし。これまた這竹生いしげり、前後の人も見えがたく足元は滑りては倒れまた竹にからみては往くことあたわず。ようやく伐り明けて行くこと二里余にして小樽沢の口に下る。

次にこの四か所一つ一つの部分がどのような意味を持つのか、そのことを考えてみよう。
これを次のように整理してみた。

- ① 針葉樹 樅・榎・唐松・松・榧・くろべ 六種
- ② 広葉樹 桂・ぶな・どろぼう・さるすべり 四種
- ③ 這竹
- ④ 樅の木横に這って足を踏むべき所なく

このうち①②はすべて植物名であるが、残りの③④は共にある種の植物の生態をあげていることに気がつくことと
思う。いずれにしても、これらの記録からは当時の横川山
の樹木の様子がよくわかり、今日の植生を考える上でも大
変貴重な記述である。

まず①の針葉樹六種については、よく知られた種類である
ので今回の読解でも理解ができたけれども、②の広葉樹
の中で「どろぼう」「さるすべり」の二種については、そ
れが何を指しているのかということが随分と話題になった
ので、少しそれについて触れておこう。

「どろぼう」といきなり出てきたので誰でも驚いてしま
うが、かつて諏訪宮林署に勤務され、横川山に詳しい唐沢
今朝之氏は、「これはヤナギの仲間でドロノキ（別名ドロ
ヤナギ）と推定するのが妥当である。ドロノキまたはドロ
ヤナギのいずれにもある「ドロ」がこの「ドロボウ」なる
木の語源に通じるのであろう」と話してくれたが、確かに
なるほどと思う。ついでに記しておく、信濃国分寺（上

田市）の八日堂縁日で売られる護符「蘇民将来符」の原材
料は、このドロノキである。ところが、このドロノキがこ
こ数年減ってきているため、お寺の信徒等で設立した「八
日堂ドロノキ育成組合」が長野宮林局と契約を結んだ国有
林にドロノキを植樹したと信濃毎日新聞は報じていた。

このドロノキが巡覧記では「どろぼう」として出てくる
のであって、こうした呼び方の違いはよくあること故、と
りわけ古記録を読む時には留意する必要がある。

もうひとつ話題になった「さるすべり」の方についても、
唐沢氏は「木の肌がつるつるとして、山で見かけるリョ
ウブにも似たナツツバキではないか」という。ちなみに北
隆館発行『牧野新日本植物図鑑』によると、ヒメシヤラの
項に「ヒメシヤラは姫沙羅で、ナツツバキを誤って沙羅樹
と呼び、本種はその木に似ているが、小さいためである。

また樹皮がつるつるとしている点でサルスベリ・サルナメ
リなどの別名がある。猿もすべってのぼれまいと見立てた
ためである」と記載されており、これらを総合すると、ナ
ツツバキ・ヒメシヤラを総称してサルスベリといっていた
ということがわかり、巡覧記に出てくる「さるすべり」も、
こうした背景のもとに呼ばれていたのだと考えると、やは
り納得がいく。

なお、このナッツバキは日本の特産植物で、福島県を北限として四国・九州・対馬まで分布している暖地系の植物である。しかし、上伊那では自然の山中で見られることはなかなかできず、ただ庭木として寺院やわずかの人家の庭に見られるだけであった。昭和六年上伊那郡教育会発行『上伊那郡植物目録』によると、当時上伊那南部と川島・小野の二ブロックにだけ分布していることが記載されているが、この目録作成の基礎になっている上伊那郷土館所蔵の標本庫にはナッツバキの標本が欠如していることから、幻の植物とされていた。ところが、この「横川山巡覧記」が話題になったことで、前記唐沢氏や川島の人たちから横川溪谷に数か所このナッツバキが点在していることを教えられた。その一つとして、横川の蛇石に下りていく所にある広場の北側の林道を千五百メートルほど上ると、左側に車の退避場があるが、その東斜面に高さ十メートルくらいで直径十センチほどの太さのナッツバキがある。この夏には想いをはるか昔の「横川山巡覧記」に寄せながら、ぜひ鑑賞されることを勧めたい。話題が少し横道にそれってしまったので、話を元の「横川山巡覧記」に戻すことにする。

③の「這竹」については、先に指摘しておいたように相当詳しく、しかも鋭い観察眼でよく植物の生態を見極めて

いるので、おおよそ、その形態については理解ができ、この「這竹」は何であるかも見当がつくことと思う。少し登山経験のある人ならばほぼ推定がつくであろうが、私たちが俗にいうクマザサと見ればよい。もっとも熊笹と書かれる時のササは植物の種名のクマザサ（隅笹）ではなく、熊の出るような山地のササを総称しているのであって、一般にはネマガリダケともいわれるチシマザサをいうことが多い。けれども、この「横川山巡覧記」で報告されているササはこれとは別のシナノザサの方である。タケやササの分類は難しいので細かいことは避けるが、このササが重なり合って、しかも人の背丈をはるかに凌ぐほどの高さがあり、確かに前を行く人を見失うほどであるとの記述は、あのササ群落を押し分け押し分け難渋して登った者でないとわからないであろう。百八十年も経った今日、なお現象的には当時さながらというのが、連続四年にわたって経ヶ岳・坊主岳調査をした私たち植物班員の実感である。

④の「樅の木横に這って足を踏むべき所なく」の記述については最初読んだ時には完全に見過ごしてしまっていたが、今回の古文書学習講座終了間際になって赤羽篤氏から「今まで気がつかなかったが、どうもこれは這松を指しているのではないかと思う。もう一度調べてみてほしい」と

いわれ、にわかにはだわりの持つようになつた。けれども、これは正直いってなかなか難しい問題であるように思う。

そこで第三に取り上げたいことは、この道松である。

「縦の木横に這つて足を踏むべき所なく」の記述の前後を見ると、この見分登山のコースが推定できるので、そこから見てみたい。「横川山巡覧記」では、その肝心のところをこう記述している。

*「此所なきつら共云ふ。キャウガ岳の北にして八分目に当たり、今少し登らば岳の頂きにも到るべし」

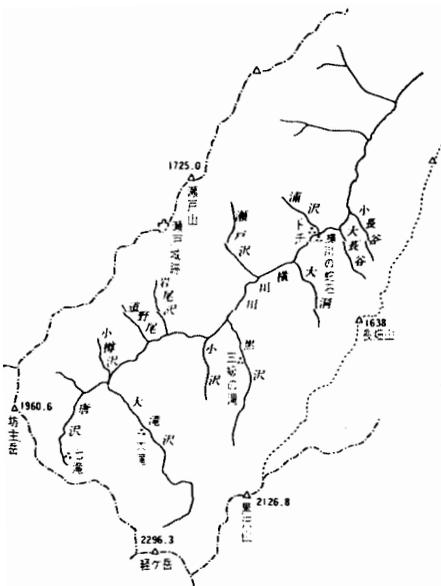
とあり、これに続いて肝心の「峰通りは縦の木横に這いて、足を踏むべき所なく」の記述が出てくる。こうしてみると、どうもこの記述は、経ヶ岳を調査しようとして、その北側から登頂を試みたものと思われる。

植物班の調査でも、経ヶ岳から北に向かい、坊主岳への縦走を試みたのだが、先に述べたようなシナノザサに行く手を阻まれ、ついに果たすことができなかったのだ、この間のことは全くわかっていない。ただ、ここにいう「なきつら」という場所がどこを指しているのか、その手がかりをこの一行が作成した絵図に求めてみたが、残念ながら絵図のどこにも見つけることができなかった。しかし、前記唐沢氏は、この巡覧記を読み、現行の地図にあてはめてく

れた。それが左の地図である。

これによると「なきつら」は、経ヶ岳から北に向かい、坊主岳との中間点に位置し、その手前が「仏谷」という。先に述べた経ヶ岳から坊主岳を目指した縦走の際は、この仏谷を経て坊主岳へと試みたのだが、シナノザサに道を阻まれ、ついに七滝の上に出てしまったのである。

それにしても、この峰通りに縦の木があり、その生えている様子が横に這い、足を踏み入れることができないとい



横川溪谷 — 横川山十二洞 — (『辰野町誌歴史編』より)

うのである。肝心なことは、この「峯通」の解釈であるが、どうも一般的にいうと、これはいわゆる尾根道だろうと思う。しかし、こうした尾根道で這松を見つけることはできなかった。植物班の調査で這松を確認したのは坊主岳山頂だったのである。けれども、この「縦の木横に這って足を踏むべき所なく」の記述のうち、縦の木は一先ずおいたとして「横に這って足を踏むべき所なく」という記述のみ取り出してみると、確かにこの部分は這松の生態の特徴を良くとらえており、西駒ヶ岳で見られる這松の生態そのものといえよう。

とすると、一体この「縦の木横に這って足を踏むべき所なく」の記述をどう解釈したらいいのかと考えあぐんでいたところ、赤羽篤氏から「郡代岡村十郎兵衛は、同じ高遠藩が天明四年（一七八四）に行った駒ヶ岳登山に同行したと思われる」ということを助言頂いた。

「殿島年代記」によると、この年郡代阪本天山が駒ヶ岳登山を行っており、この時岡村権左衛門とその子息が同行している。赤羽氏は、「岡村家の系譜が判然としないのでその名がわからないが、年代から判断すると、この子息というのは横川山見分登山の最高責任者である郡代岡村十郎兵衛と思われる」というのである。

そうした一方で駒ヶ岳に這松があることは、やはり高遠藩で宝暦六年（一七五六）に阪本英臣が中心となり行った「駒獄見分復命書」に「這松岩窟の内を罷下り」とあることで明瞭である。だとすれば、この後で行われた天明四年（一七八四）の駒ヶ岳登山の際にも、きっと這松を見ており、承知しているということはいえないだろうか。もしこうした推量が許されるとするならば、横川山見分登山最高責任者であった郡代岡村十郎兵衛は、若い時とはいいながら、きっとこの這松の実態を自分の目で観察しており、その眼をもってすれば、這松を「縦の木」として、なおかつそれが「横に這いて足を踏むべき所なく」と記載することはいかがなものか？ この項の初めに述べた通り、この這松にかかわることは今回の講座の最後にきて、にわかにはだわったことだけに、全く粗雑のそしりを免れることはできない。今後折を見てさらに調べてみたいと思っている。

それにしても、今回「横川山巡覧記」読解の成果をまとめたこの「辰野町資料」が、郷土の自然の過去を振り返り、現在と未来を考えることに多少なりとも役立てばというのが、私の想いでもある。

最後にこの項をまとめるに当たり、赤羽篤氏から多大のご教示を得たことに対し、深甚なる感謝の意を表する。

横川山巡覽記意識

北原優美

寛政十一己未五月二十八日

先日、横川入りの御立山（藩有林）の見分を命じられたが、来月七日か八日頃には出発できることを申し上げた。

一、この見分につき、御代官一人、御山方（藩有林役所）一人を同道するべきかお尋ねしたところ、御用番の五郎左衛門殿（年寄り役の来栖氏か）は同道するようにおせられた。それで伊藤安蔵（代官）、小林杉左衛門を同道し、記録係として伊藤形助を同道するつもりであることも一応申し上げた。

一、高山のことなので、気掛かりなのは万一雨天続きになった場合のことも考えると、往復にどれくらいの日数がかかるのか決め難いこと、山中で仮泊することなど考えて、鉄砲を持参したいのだが許可を頂きたいと申し上げたところ、自由にするようにと御用番はおおせられた。

一、右の日限に行くことを横川村へ連絡するよう、中山忠

左衛門（代官）へ命じた。取り立てて御馳走をすることのないよう、ことに今度は大勢の人数を連れていくことでもあるので、村に負担のかからないよう代官に申し付けた。

六月朔日

一、伊藤安蔵・小林杉左衛門・伊藤形助へ同道するようにと申し渡す。ただし、目付として後藤伴右衛門、平役として本田伝五左衛門を岡村十郎兵衛の供として連れていくので、賄い費は別途に考えるところで小頭へ申し渡す。もっとも伊藤安蔵も下役の者を連れていくので、賄いに費用がかかるから、すべて手輕に済ませるように村方へ伝えるよう同人に申し渡す。

同日

一、右のことを連絡が済んだと安蔵から報告があった。
一、右の登山のことを申しやるに付いて、山中の泊り小屋や、どの道筋を取るべきかなど忠左衛門に訪ねたところ、泊り小屋は山師たちの細工小屋でも間に合うだろうという。時によっては行きがかりで野宿もするだろうが、決してわざわざ小屋など建てさせるに及ばないと言って置くように、道筋も、行きがかりで通れない所は伐り明けて通っても済む

ことであるから、わざわざ道作りに及ばない、また食物は、米・味噌くらいでよく、野菜物など多く持つてくることは決してないようにと申し付け、しかるべく挨拶を済ませた。

五日

一、荷桐油（荷物用雨具）七枚・渋紙八枚 御武具方より

一、渋紙七枚 御賄い方より

右の品を申請し、御用の済み次第お返しすると差し出し帳に記させ、これを受け取る。

一、鍮持ち 御中間一人

一、蠟燭 十五挺 ただし三十目掛け

右を申請して受け取るよう伊藤形助に命じた。

六日

一、総人数を次のように決めた。

岡村十郎兵衛 供

組目付

後藤伴左衛門

本多伝五左衛門

若 党

原谷四郎左衛門
本多与惣治

御願い申し達しの上召し連れ

日影村 中村善右衛門

駕 籠 人足六人

駄荷馬 一匹

同 一匹

ただし若党へ相合い

鍮持ち 一人

草履取り 一人

分持ち人足 一人

合羽籠 一人

馬 二匹

ノ十六人

伊藤安蔵

下役

岩崎源蔵

乗り馬 一匹

荷付馬 一匹

草履取り 一人

分持ち人足 一人

小林杉左衛門

乗り下 一匹

伊藤形助

乗り下 一匹

六人 四匹

総ノ二十二人 内 人足九人

六匹 内 乗馬三匹

一、三日町の橋場は馬が通れないので、平出村を通過して行くことにする。同村に宿泊を申し付け日限を連絡しておくよう伊藤安蔵に命じた。

一、町人の馬を平出村で継ぎ立てるつもりなので、明八日九ツ時（正午）に差し出しておくよう記録係へ申し渡す。もっとも安蔵・杉左衛門両人ともに。

八日

一、四ツ時（午前十時）過ぎ、お城へ行き、いよいよ今日横川村へ出発することを報告した。大目付中へも届け、口上にてお断り申し上げた。

一、大遠目鏡をお借りしたいと、この間御用番の孫右衛門（新井）殿へお願いしておいたところ、今日お渡しなさって、これを受けとった。

一、正午過ぎに高遠を出発。

一、芦沢村にて小休、笠原村にて小休。

一、卯ノ木茶屋にて小休、茶代を渡させる。

一、御領分の境目へ上伊那郷の村役人たちが出迎えに出ていた。

一、樋口村の勘五郎宅にてしばらく休む。平出村・横川村の村役人が顔を出した。

一、平出村へは暮れ前につき宿泊した。名主 文史郎

九日

一、五ツ時（午前八時）過ぎ平出村出発。

一、飯沼沢村河原にて小休。

一、九ツ時（正午）前、門前村につき宿をとる。瑞光寺。

ただし、この季節は蚕を飼うのに忙しい時で、一般の家では迷惑がかかるので、先日申し付けて問い合わせた上、この瑞光寺に宿を申し付けた。

一、村役人たちを呼出し、山内の様子を尋ねたところ、道の状況は全くよくないので、昨日から藪の深いところは枝払いして伐り明けたので、今後村の山仕事をする者たちが喜ぶだろうとのことであった。

山小屋は、柳小屋というところへ宿泊するつもりで、小屋もあるので少々直したり継ぎ足したりしたということである。その場所まで、明日は早朝に出立して少なくとも一日

がかりでようやく着くだろうとのこと、行程あわせて四里（一六キロメートル）とのことである。

なおまた、いら沢村の儀兵衛という者を呼出し山中の様子を詳しく尋ね、絵図面を見ながら見分の手筈を評定した。一、山へ持っていく道具や、それにかかる人足の数を考えて米・塩・味噌を計算し、無駄の出ないように考えて申し付けるよう、伴左衛門・伝五右衛門に命じた。

十日

一、五ツ時（午前八時）過ぎ門前村を出発。供廻りと従者は左の通り

十郎兵衛・伴左衛門・鍵持ち・安藏・草履取り

伝五右衛門・草履取り・杉左衛門・源藏

四郎右衛門・形助

与惣吉 門前村名主新五郎

善右衛門・飯沼沢村同 兵左衛門

兵右衛門

山案内

忠三郎

獵師 甚之丞

市左衛門

八左衛門

津右衛門

門前組頭

彦兵衛・理右衛門・吉右衛門

飯沼沢年寄り 所右衛門・吉兵衛

人足五十四人

村方より山まで都合

人足五十四人召し連れ候

但し勝手働きや村の用達も兼ねて

一、村の年寄りたちのいうのには、これより入谷にゅうやという所までの一里ばかりの間は、道幅も広く馬も使えるので、駄馬に鞍を置いて乗って行けばいいが、駕籠は通れないという。ここから歩いて登るつもりでいるので、その心遣いは無用であるといい、すぐに半纏・股引という服装で、寺から歩いて出発した。

いら沢村の観音堂でしばらく息を入れ、先年中谷村と入会争いのあった向山など遠くに見ながら歩きだした。中所までは少しきつい登りで横川村のうちを歩く。川原を歩きそれから除道にさしかかり、上がり下り屈曲さまざまの所を半里ばかり行くと、入谷という家四軒ばかりの集落に着く。

川向うは日向といい、家が六軒ばかりある。その下の川東に中谷という集落があり、家が八軒ばかりある。この入谷を過ぎると山の神の森がある。ここに小休して山の様子を村の老人に聞くと、「この先を洗仏といって、昔観音様

の出開帳があった渚だということでありませう。今も青々とした深淵があります。この観音は木曾義仲の奥の城の守り本尊だということで、御身丈は一尺二寸ばかり、殊の外靈驗あらたかな尊靈で、今は瑞光寺の境内に安置してあり、近郷近在でも一番崇拜されています。洗仏の先を御堂平といい、昔この観音様を安置した場所だと言ひ伝えております。」

ここは御立山の入り口で、西をよきとき沢という。南に向かつて東を蛙平という。両所とも村山である。東を小長戸・大長戸・鷲岩といい、これらはとても険しく見える。西を浦沢・瀬戸沢といい、これらも最も険しい。この瀬戸沢の口にて小休する。

ここに至るまで千尋の岸壁で、道の幅はやっと二寸あるか無しである。場所によっては木の根につかまったり岩角に手をかけて越えて行く。それから先は道欠けという。ここは少し平な場所、昔木地師が住んでいた所だという。当時は炭が二つあって年中灯火がついていたという。この辺り所どころに炭がま多く、その岩根、あっちの木の根に灯火を立てた。

それより丸山という峠にさしかかり、山上へ二町ばかりを登った。ここからは至って難所が多く道らしい道はない

ので、岩角を踏み木の根に取りつき、ようやく登る足の掛け所をこしらえて登った。まるで梯子を登るようであった。

入谷にて

分け入らむ末はいづくと白雲の

八重立つ岸をけふや越ゆらむ

山の名の長きを如何にたどるまし

ひはらいぶせき谷の下みち

それより助蔵落としいって、岸壁の中央を伝う所がある。何にしても、ここは極めて難所で、後を振り返ればそのまま落ちてしまうような心地がする。岩間の角々へ足の指をかけて岩角に取りつき、継ぎ足に渡ること二十間ばかり、ここでは昔山仕事をしてきた助蔵という男が落ちて死んだという。それで助蔵落としいという名が付いている。上からは岩石を引ききり、下は数千丈のさべ岩で、谷底を流れる川は岩に逆巻き、誠に恐ろしい思いをして渡った。従う人々も、このようにして渡るのに一苦勞をした。村の老人達に聞いていたよりも危難の場所であったので、特筆する。

君の命は泰山よりも重いというが、そうかと言ってここで引き返すのも本意でなく、手足の続くだけ行って見ようとして伝っていくと、長五郎太という少し平な場所に出たの

で、ここでしばらく疲れを休める。ここは昔、長五郎という男が山の神に投げられて死んだ所だという。この下に箱淵という深い淵がある。

それから河原小屋という所に下る。このところは岩の梯子を下るようである。助蔵落とし程の難所ではないが、前向きには下れず、後ずさりに下る。足壺をつけ、それへ後がけ、あるいは木の根に取りつき下る。

ここを河原小屋という。ここで昼食。木地師の小屋がある。それから又西に向かつて行く。岩根に登り、木の枝を伝い、小袋岩・大淵・長くる淵・大くる淵・ふったり坂などという所を越えて、東は大洞・小沢・ふったり坂の名所がある。ここから川東へ移り、和泉小屋という木地師の小屋にて小休する。

西の方には岩尾沢・道の尾沢などが見える。石あらし・ふったり沢などが見える。これを越えて小垂沢の下、柳小屋という所に至る。ここにこのたびは泊まることにして、岩根も壁も木の皮で葺いた九尺四方の小屋を三つ掛けさせ、かまどを立てさせた。

これまでの道筋を書き留めようとしても、なかなか筆紙に尽くし難い。岩根や山の平を横に伝い、道とはいいながら幅がやっと一尺ばかりの所もあり、またある場所では足

壺はあるが上は古木が生い茂って空も見えず、日の光さえ見えず足下が暗い。下は青い流れが泡立って岩間にむせんでいる。行程はどのくらい来たかと里人に聞けば、門前村よりここまで三里半余りだという。しかし難所ばかり渡って来たので、平常の道の五里以上行った心地がする。時の頃はどの位かと日時計を出してみると、八ツ時（三時）過ぎになっていたので、しばらく従者の足を休ませた。

まだ日も高いので、大瀬沢（大滝沢）のうち名に聞く大瀬まで何里ばかりあるか、日のあるうちに帰れないとすれば、今日行くことにするかどうかは評定することにし、岩登りの用意を申し付けた。「今度こそ物凄い難所で、容易に越えることは出来ない」と村の年寄りどもがいうので、供の者は残らず刀を置き大脇差し一本だけ指させ、自分も身ごしらえを改めて刀は従者に持たせ、里人の案内を先に立てて出発した。

唐沢の口・大たるの口の出合いから、南に向かつて川に沿ってよじ登ると、岩石が甚だ多く、それを這上がり這い下り、岩の隙間に木の枝を差し込んで、それに取りついて越える所もあり、淵になった所に奇岩が出張って通れない所もあり、山へ登ってそこを越えて行く。「がきがのど」という大淵に着く。これまで川に沿ってきた中にも、なか

なか聞きしに勝る難所があって、行きなやむことも度々であった。里人たちもこの谷は山中一の切り立った所で、通い慣れた者も後を振り返ることができない、先のことも知らぬ場所があるそうだという。

この淵より先へ行くと、兩岸岬々たる岩石が横にそびえて岩石に包まれた淵で、へつって渡る所もない。それで右の方の岸壁へ登ること六十間ばかり、これも甚だしい岩崖で、一度に大勢が登れば石が落ちそうな様子もあり、二・三人づつばらばらにして登らせ、下の河原に人を留どめ、案内を先に立てて岩の鼻を踏ませ、取りついて登る。誠に恐ろしく、後を振り向けばそのまま落ちそうな気がして、先に登る人の足ばかりを目当てにして、定式の足壺より行きようもない。一足踏み違えばそのまま進退きわまつてしまいそうである。それから横に伝うこと二町余りの間いたつて急角度で、手を連ねるようである。岩の平中央に幅三寸、五寸という割れ目があれば、それを足がかりにして木の根・岩角へ取りつき、継ぎ足で行く。また下るにしてもそのようにして川岸に下り立てば、もう大滝に程近い。このへつりを渡るうちは、本当にこの上なく危険で、生きた心地もしなかった。たまたま少し足だまりのある所で下を見るのと、千尋の水壁がそばだつて、谷底にたたえた深淵からは

泡を吹きだし、四方に岩石が囲んで水底の深さも知れない。二間半の材木も落ち込んだら一時間以上も浮き上がってこないと聞く。

そこから大滝に至るまでに川を左右に渡ること六度にして滝の下に着く。もう十五、六間前から飛沫が袖を濡らし、沢水がそのまま身にかかるようだ。東から落ちる滝は高遠の藤沢川ほどの水量で、一筋になって岸壁を離れて落ちてゐる。高さ二十間ばかりである。その上に二丈ばかりと十間ばかりの滝が二段あるそうであるが、下からは見えない。なかなか登ってはみたいが登りようがない。外山から廻って行けば見えるそうである。

滝壺のふちから七、八間上った滝水の中に、釈迦つむりという（絵あり）この絵のような岩がある。大滝がそれへ打ちつけ四方へ散ること六、七間、岩間一杯になって落ちている。八、九間も向こうの岩間へ伝って行くと、たちまち飛沫に濡れて雷雨にあったようになった。西から落ちる滝は、水かさが右の三分の一である。高さはおよそ五十間ばかりもあるように見えて、数段に落ちてくるさまは素晴らしく、絶景である。

この滝は左の方を登れば上ることができそうなので、それは上るべきなどと話し合っていると、案内の者がしきり

に留めていうのに、「とても上れるものではありません。半分程は震えながら行けても、滝壺を覗き見しているように決して上れず、下るにしても足壺が遠くて非常に難しい」という。なにしろ岸壁が四方を取り囲んで、渡り十間ばかり壺のようになったところへ両方から滝水が落ち込んで、いかにも険しい水勢である。滝の近くは風が非常に冷たく、身の毛もよだつようである。人々は心細い気がするなど口々にいって、それからまた前に来た險阻の道をたどって帰った。

七ツ半時(午後五時)ころ柳小屋に戻って、今日は本当に命拾いをしたといつて笑い合った。この険しい様子はどうのようにしても筆紙に尽くし難いと思へた。

大滝にて

いかにして鳥もかけらん千尋ある

岩にさかまく滝のしらなみ

山小屋にて十二洞を越えて来たりしことを思い出して
右に六重左に六重の山越て

今はまじらの影さへも見ず

一、壺の小屋に着いて、それぞれ宿泊の用意をして昼の疲れを休め、また、明日の道筋の評議をするよう申し付け、村の年寄たちを呼び集めて山内の様子を尋ねると、諸木多

い中に縦(楸)・榎・桂・唐松とまゆが多くあって、そのほかは雑木で、ぶな・どろぼう・さるすべりなどが多い。(建築材として有用な)栗・松・しらびそなどは一向にない。松・榎・くろべは少しはあるが、この類はとかく熊や猿が皮を剥いて食べ、枝木皮入りになっていて、用材として役に立つ木は少ないという。

大たる・唐沢などは、木は沢山あるが出材の方法がなく、出水などでうまく出せても十分の一は役に立たないだろうという。とにかく険しいところが多く、高山であるので多くの滝や岩に当たって木が損ずることが多く、皆裂け損じて出し難いという。その上、奥山のことで七、八日も泊まりがけに来て伐り出し、出水を待って狩り下しても、ややもすれば下まで出すのに十二、三日もかかって、商売にはならないという。

日向山の方は昔残らず焼けたということで、木もなかなか茂ってこないという。日数で十二昼夜焼けたと言い伝えているという。

(十一日)

一、六ツ半時(午前七時)、登山道具を調べ、人数を揃えて唐沢の方へ出発した。小たる沢の口を過ぎて向こうを見

ると、数千丈の岸壁が高くそびえ立ち、渡りも十町ばかりと見えて、生きていくように、落ちかかってくるようにも思えた。これは何という場所かと案内に聞けば、仏谷といつて一枚の岩山であるという。下からも上からもこの平に行くことはできないという。

その岩の根を伝って川を越え、山へよじ登る。右の方に唐沢・中唐沢・かったりほの名所があり、いずれも険しい山である。左の方は仏谷・きはた落とし・かんべら沢・ここみ沢などの名所があり、いずれも険しい山でこの川はほとんど岩山である。それゆえ見事な滝が沢ごとにある。

この中のここみ沢を分け入って見ると、始めは別に変わったこともなく、この唐沢の中では随分登りやすい沢だと案内の者もいっていたが、中頃から岸壁のある所にさしかかり上を見れば、岸壁がのしかかってくるようで、八分は腹ばいのようにして登る至って急な山になった。そこを真直ぐに登ること二十町ばかりは途中で休めるような足だまりもなく、岩の角々に大勝斗（不明）を掛けて角に取り付き、急梯子を登るような所で、足よりも手で登っているような気がする。

九分目頃になって這竹はたけという真竹のように細くて、丈の六尺ばかりのものが四方へ這い迫って、押し分けようにも

押し分け難く、乗り越えようにも乗り越えにくいのをしゃにむに押し分け、伐り開けて登ること三・四町にして絶頂に出る。この場所を「泣き面」ともいう。経ヶ岳の北側八分目に当たり、もう少し登れば岳の頂きに出るだろうから行こうと思いたったが、里人たちがしきりに引き止めて、なかなか日のある中に頂上までは出られないだろう。峯通りは樅の木が横に這って足の踏み場もなく、平へ出れば岸壁がそそり立って決して通れない。この九分目は「さんはふり池」という小さな水溜り（原文では浪水なみず）があり、ここまで上って雨乞をすれば、いかなる早魃であろうとも少しは雨が降る、降らないということはない。とはいいいながら、よくよくの渇水であればともかくとして、一通りの日照りくらいでは行かない。本当に命がけで行くことなので、村中でも行ったことのある人は数少ない。先の大早魃のときにも、この唐沢の峰までは五く七人がやってきて雨乞をしたが降らなかつたので、いら沢村の儀兵衛という格別剛胆な男がこの池にやってきて、水を掻立てて濁したら、しばらくして雨が降り雷鳴がとどろいて、里までもお湿りがきたという。この儀兵衛という者は今度の見分にも案内として加わっていて、直接その口から話を聞くことができた。

唐沢の峰で人声がすれば雨天になるということ、今日

も雨具を用意したが、昼間は雨も降らず、夜に入って暮れ方からしきりに雨がそぼ降って、唐沢から柳小屋の辺りまで降った。里人たちは何時上っても雨が少しも降らないというのではないといっている。

この峰でしばらく息を入れ、昼の支度をしながら四方を遠眼鏡で見ると、西は木曾谷に奈良井・藪原・福島辺りが眼下に見えた。向こうは小木曾・御岳などが見えた。南の方角に山間からありありと海上が見えた。これはきつと名古屋の浦であろう。北は松本の野面が眼下に見える。東は山に遮られて見えないが、地藏ヶ岳・八ヶ岳などが見える。そこからまた出発して「がっさり」の絶頂に行つて見れば経ヶ岳と大体同じくらいの標高に見える。ここからは尾州領の御巢山に続くはげ山である。御巢山へは毎年境目見分にきて分杭を打っているように聞いているので、見てくするように人をやってみると去年は野呂源六という人が登つたと立ち木に書いてあるという。我々もここへ次のように分杭を認めて立てておいた。

「寛政十二己未年六月十一日 郡代岡村十郎兵衛・代官伊藤安藏・山方小林杉左衛門 見分のため登山」

それから峰伝いに出唐沢の奥に至る。これまでの一里余りのところ全部、這竹で、重なり合つて茂っているので、先

を行く人を見失うほどである。その中を押し分け押し分けして、縦・梅の茂つた木の下圍をたどつて唐沢の岸に着き、それからこの尾崎を下つたのであるが、これもまた這竹が茂つて前後の人も見えにくく、足下はすべては倒れ、また竹に絡み付いて進むことができない。やつとので伐り開いて行くこと二里余にして小樽沢の口に下つた。この道筋は始終這い上り這い下りして立つて歩くことが甚だ少ない。暮時前に柳小屋に着いて、この夜もここで夜を明かした。また明日は小沢の峯に上つて向山の谷々を見分しようと思つたが、この小沢は至つて岩山で上ることが難しく、その上丈高い木々が茂りあつて一向に遠見もできないと案内の者がいうので、それなら行つて見て、この辺まで大方は唐沢の峯から谷々洞々が眼下に見えて、一洞ずつの絵図も出来ていることだから、明日は本沢の町間を改めて沢々の方角を振り当てながら下りて、正確な絵図を書き上げ永々の重宝に備えようと評議が定まつた。

この夜は月影がとて清らかで、しんしんとした木の間からさし入る光は物凄くまた冷え冷えと思われた。

ましろさへ住まぬ深山の奥迄も
月のはかはらぬ影のすずしさ

里遠く分け入る山の奥に又

すむ影すき夏の夜の月

十二日

一、五ツ半時（午前九時）柳小屋を踏み出して、元来た道を門前村の方へ帰りながら、沢々・谷々の方角を絵図にぶり付け、道の町間を改めて、上ってきたときのように岩根・木の枝を伝いながら浦の沢入口まで下り、ここで昼食をとって又下ってくると、入谷の奥まで迎えが来ており、鞍を置いた馬を村方から出しておいでくれたのにまたがって七ツ時（午後四時）過ぎ頃ようやく門前村に着き、また瑞光寺に宿を取った。

一、少し疲れを休めてすぐに絵図の分間を改めさせ、五間を一分の縮尺で道のりを書き込み、とかくするうちに夜も更けてきたので、後は明日のことにして休むように申し付けると、そんなことをしては帰るまでに間に合いませんと、徹夜で下絵を付け、鶏の鳴き出すのを聞いてから就寝した。

この本沢の道のりを計ってみて、沢の内は一里二十四・五町と見え、門前村から大体三里と見えるけれども、山谷難所を渡らなければならないので、五里余りではないかと思われる。終日かかってようやく門前村に至る道のりであ

る。

十三日

一、昨日の下絵に彩色を入れ、名所々々を書き加え、分明の所は村里の案内者に尋ねて詳しく書き入れ、見取りの絵図と引き合わせて分間の絵図を仕立てていると、日の長い季節なのに日も高くなって未の刻（午後二時）になって完成した。それからすぐに出発して、この夜は羽場村に宿を申し付けた。

銀子一両 瑞光寺へ

いろいろと臨時の世話になったので

酒代三百文 飯沼沢村名主 兵左衛門

同 二百文 門前村 同 新五郎

山中骨折り親切にしてくれたので

右は書記（記録係）に命じてさしつかわせておいた。

必ず遣わさなくてはならないことでもないが、俺の気持で遣わすのだと話しておいた。

一、羽場村へ暮れ方になる前に着き、覚左衛門方へ宿泊する。

一、昨日下午山の際、飯沼沢・門前村へは山の中まで大勢の人足を申し付けたので、送らせることはせず、迎えの人馬

は上島村・今村・宮所村へ申し付け、羽場村へ泊り宿を申し付けておくように安蔵に命じた。ここから高遠までの人馬を羽場・北大出両村に申し付けておいた所、組合になっているので新町・宮所からもさし出す由、安蔵が報告してきた。

一、御立山十二洞のことは絵図面に詳しく分間を記入したので、これに載せない。この記録をもって絵図面を見れば委細が分かると思う。もっとも、材木や奇石などは詳しく記入することはできず、大方は書き漏し十分の二か三にすぎない。

十二洞の名所は左の通り

日向がわ 鋪沢（浦沢）・瀬戸沢・岩尾沢

道の尾沢・小垂沢・唐沢

日陰がわ 小長谷沢・大長谷沢・大洞沢

黒沢・小沢・大瀬沢

十二洞、この間小沢数多あり

十四日

一、五ツ半時（午前九時）頃羽場村出立。

一、今日は駄馬も荷付馬も残らず半乗りに申し付け、供廻りの者たちも二人で交代に乗っていくように伴左衛門に申

しつけた。

一、卯の木の茶屋で小休止し、茶代を二百文置かせた。

一、八ツ時（午後二時）前高遠に到着。直ちに御用番の孫右衛門殿方へ行って御届け申し上げた。山の様子は明日また登城して詳しく申し上げるつもりと申し上げてきた。

一、大目付へも手紙を持たせて報告した。

一、同役中へも帰着の案内を持たせた。

十五日

一、今日、お城へ行って山中の様子を絵図面を使って詳しく申し上げた。この絵図面は差し出して置いた。

一、山中には樅・榎・桂などが多く見え、松・槲は少ない。もっとも熊や猿が中段の皮を剥くということで、材質のよい木は見当たらず、その外は雑木がいろいろあるが栗は少ない。しらびそなどの種はないようで唐松は少しある。

二十日

一、雨具の桐油・渋紙など、今日御武具方・吟味方へ返却したと儀右衛門から報告があった。

『辰野町資料』について

『辰野町資料』は、辰野中学校が郷土について正しい理解と深い愛情を啓培しようとする戦後の教育実践の研究調査記録や、更には近い将来における町誌編纂の資料にもと、広く収集収録の資料集として昭和二十六年に創刊したものである。

以来、昭和四十一年には第五十五号に及んだが、辰野町教育委員会がこれを受け継ぎ、昭和五十五年に待望の町誌編纂事業が発足すると、編集発行は同編纂委員会に移管され、これをとおして編纂事業は大きく進展し、誌令は第八十四号にも達し、これに収集蓄積された成果は『辰野町誌』三巻に結実され、初期の目的は達成された。

しかし、町誌編纂事業を進める過程で、自然を愛し、歴史に学ぼうとする町民の気風は一段と高まり、今度は『辰野町誌』の刊行を出発点として自然環境や文化財の保護活用等に向かって『辰野町資料』は地道な歩みをスタートしている。担当は再び教育委員会であるが、特に文化財保護調査委員が中心となり、すでに第八十七号に及んでいるが近刊三巻はいずれも好評である。

赤羽 篤 (あかはね あつし)

大正9年 上伊那郡川島村(現辰野町渡戸)に生れる。
長野県師範学校を卒業し、県下の小中学校に勤務し、かたわら県・郡・市・町・村誌の編纂に関与した。
現在 辰野町文化財保護調査委員長

茅野 益穂 (ちの ますほ)

昭和7年 諏訪郡宮川村(現茅野市宮川)に生まれる。
信州大学教育学部を卒業し、県下の小中学校に勤務、そのかたわら郡・市・町・村の自然研究調査にかかわる。
現在 辰野町文化財保護調査委員

横川山巡覧記

平成8年3月20日 発行

企画	建設省中部地方建設局	長野県駒ヶ根市上穂南7-10
発行	天竜川上流工事事務所	〒399-41 ☎0265-82-3251
著者	辰野町教育委員会 赤羽 篤 校訂	長野県上伊那郡辰野町中央1番地 〒399-04 ☎0266-41-1111
編集	北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町豊科4574 〒399-82 ☎0263-72-6061
印刷	双葉印刷(有)	長野県松本市城東2-2-6 〒390 ☎0263-32-2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

天竜川は独特の形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしています。後背に多雨域をもつ三峰川・小渋川・太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量の土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方、この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水ごとに濫流する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。反面、天竜川は母なる川として地域の人々の生活を支え潤してきました。田畑を灌漑し、漁獲をもたらし、山深い信州と他国を結ぶ物資の交流の場でもありました。情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んできました。伊那谷の風土は天竜川と無関係ではあり得ません。今後とも、天竜川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水したり、汚したりすることは避けねばなりません。

この天竜川を鎮め、水を高度に利用するための地元の長い営みの後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、その間地域の皆様からの多大なご協力のもとに、天竜川の安全性は格段に向上しました。しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめ、河川施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。また、水害防止と利水に一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え、その方向に向けて管理してゆくことがこれからの課題であると考えます。

「語りつぐ天竜川」は、天竜川の治水に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立ちたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長 中 安 正 晃

「語りつぐ天竜川」目録

- | | |
|-----------------------------|--------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山啓一著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤秋司著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木徳行著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條宏之著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野秀章著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤武著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村真直著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢清人著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢秀夫著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山啓一著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平元護著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 — 伊那郡松島村 — | 市川脩三著 |
| 13. 川筋の変遷 — 天竜川と三峰川の場合 — | 唐沢和雄著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎敏孝著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原優美編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪寿門著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野重美著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤武著 |
| 20. 小波川水系に生きる — 人と水と土と木と — | 中村寿人著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡忠一著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤孝和著 |
| 23. 土木技術と生物工学 — 生きものを扱う技術 — | 亀山章著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本正治著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市村咸人著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 — 下伊那郡豊丘村伴野 — | 竹村浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田穰著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 — 『熊谷家伝記』を中心に — | 笹本正治著 |

30. 天竜川の源流地帯 赤羽 篤 著
三浦孝美 共著
仁科英明
31. 東天竜
32. 天竜河原の開発と石川除 塩沢 仁治 著
33. 伊那谷は生きている 松島 信幸 著
34. 天竜川の災害伝説 笹本 正治 著
35. 天竜川の災害年表 笹本 正治 編
36. 天竜川水運と榑木 村瀬 典章 著
37. 水辺の環境を守る 桜井 善雄 著
38. 諏訪湖 ― 氾濫の社会史 ― 北原 優美 著
39. 河川工作物と魚類の生活 中村 一雄 著
40. 天竜川上流域の過疎問題 山口 通之 著
41. 資料が語る 天竜川大久保番所 松村 義也 著
42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 関岡 裕明 著
(以上既刊)
43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 藤森 明 著
44. 『横川山巡覧記』－『辰野町資料第87号』による 辰野町教育委員会編
赤羽 篤 校訂
(発刊中)